

災害メモリアルアクションKOBE

# ACTION 2019

伝える大震災、つながる防災

# 目次

開会のあいさつ .....	1
報告会	
兵庫県立舞子高等学校.....	2
関西大学 社会安全学部 奥村研究室 .....	6
兵庫県立大学 + 神戸市立渚中学校 .....	9
国立明石工業高等専門学校D-PR0135° (明石高専防災団) 開発チーム ...	13
国立明石工業高等専門学校D-PR0135° (明石高専防災団) 地域連携チーム	16
神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ .....	19
パネルディスカッション.....	22
グラフィックファシリテーション記録 .....	38
閉会のあいさつ .....	40
災害メモリアルアクションKOBÉ2019のことば.....	41
チラシ.....	42
委員・学生名簿 .....	44
発表風景・交流会等 .....	46

# 災害メモリアルアクションKOBÉ ACTION2019

## 「KOBÉのことば」

日 時：平成31年1月12日  
開会 午前10時00分



## 開会のあいさつ

### ○牧紀男企画委員長

皆さん、おはようございます。毎年この「災害メモリアルアクションKOBÉ」の時期になると実際に年が明けたような気もいたします。ご存じのように今年の1月17日で震災から24年になります。

まず一番初めに、「災害メモリアルアクションKOBÉ」は何をやるかということについてお話をさせていただきたいと思います。「震災を体験していない人が震災を体験していない人に伝える仕組みを作り上げる」というのがこの「災害メモリアルアクションKOBÉ」が目指すことです。

この「メモリアル」という活動は長い歴史を持っています。一番初めは「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」ということで、96年から10年間実施されました。最初の10年何をしていたのかというと、今の東北と同じように復興に取り組む10年でしたので復興に取り組むいろんな人がここに集まって今どうしているのかとか、どうすることが問題なんだということを話し合ってきました。10年以降、20年目までどうしていたのかといいますと、これは今後、東北が取り組んでいく課題だと思います。10年も経つとだんだん震災を知らない世代というのが生まれてきます。若い震災を知らない子たちに、どうやって震災のことを伝えていったらいいのかというのを考えたのが前の10年でした。震災を経験した大人が震災を経験していない子供に大人の経験をお話しても伝わらないのではないだろうかというのがそのときに考えた課題でした。大人の経験と子供の経験は違うので、大人の経験を震災を経験していない子供が聞いても実感が持てないという問題があるんじゃないだろうかということです。こういった課題を解決する方法として、大人のお話を当時子供だった世代の目を通して次の震災を経験していない子供たちに伝えるという仕組みを考えだしました。一番覚えているのは、残念ながらお亡くなりになってしまいましたが、当時神戸市消防に勤めておられた井上さん親子のお話です。震災当時小学生だった娘さんに、お父さんがお話をし、さらに娘さんの言葉で震災を経験していない今の子供たちに伝える。

昨日から日経新聞がそのやり方を採用した記事を掲載しております。「災害メモリアルアクションKOBÉ」の企画委員でもある高森さんのお話です。高森さんのおじさんが震災の経験を持っておられて、当時子供だった高森さんに震災の経験を伝え、その高森さんが今、若い世代に伝えるという記事です。一昨日は看護師の酒井さんが、黒田裕子さんの経験を引き継いでその次の世代に伝えるという記事を掲載していました。これは実は私たちも10年から20年の間に開発した伝え方です。マスコミが私たちの開発した手法を使ってそういう報道をしていただいていることは非常にありがたいと思います。

この「災害メモリアルアクションKOBÉ」で私たちは何をやらおうとしているのかというと、震災を経験していない世代が震災を経験していない世代に伝えるためにはどういった新しい方法があるのかということを考えていきたいと、私たちが開発した前の10年のやり方というのは今も実は使えるのです。震災を経験した方々というのはここにもたくさんおられますし、前に座っておられる若い方はそういう先輩方々のお話を聞くことができます。ところが、次の10年ということになると、だんだんそういうことが難しくなってきます。そのときにどうやって伝えればいいのかということを私たちは考えたいと思っております。この会を通じてその次の30年に使える方法ということを考えていきたいと思っております。

「災害メモリアルアクションKOBÉ」は阪神・淡路大震災のつらい経験を二度と繰り返したくないという強い思いから、学んだことを次に活かすことができる形をつないでいこうという取り組みです。大震災から20年以上経った今だからこそ聞けることば。今しか聞けないことば。その個々の経験を未来へどう活かせるか。世代を超えて、共有し、話し合い、未来へつないでいく。今のKOBÉだからこそできるアクションです。近い将来起こり得る南海トラフ巨大地震を見据えて、これから大震災を経験するかもしれない全ての人びとへ、防災の意識を継続させ、少しでも被害を小さくするために、「未災者」が大震災を知り、さらに「未災者」に伝え、つないでいく、新しいチャレンジです。私たちはこれまでにないアクションにより、継続的な取り組みの検証と検討の場を通して、将来の被災者を減らします。

伝える大震災、つなげる防災。

本日はよろしくお願いたします。



牧企画委員長

# 兵庫県立舞子高等学校



## 災害メモリアルアクションKOBE

### 兵庫県立舞子高等学校

目的：災害時、その人にとって最適な選択をとって後悔しないほしい

#### インプットについて

今回私たちはインプットとして、  
ヒアリング調査を実施しました。

- ・11月4日南あわじ市防災訓練  
防災訓練に参加していた地域の方々に、災害に関する質問6つのアンケートを行いました。回答方法はシールの貼付です。
- ・11月7日渚中学校聞き取り調査  
渚中学校の校長先生に阪神・淡路大震災の経験や、現在学校で行っている活動についてお話ししていただきました。
- ・11月11日垂水地区街頭調査  
11月4日同様の形式で、地域と年齢層を変えて聞くために垂水駅前でも聞き取り調査を行いました。



#### 兵庫県立舞子高等学校の紹介

昨年度に引き続き、今年度も各学年の環境防災科の生徒9名が参加させていただいています。来たる南海トラフ巨大地震に備え、一人一人が生き延びるためにはどうすればいいのかを考え、活動してきました。

#### アウトプットについて

##### 西淡中学校

全校生徒対象

- ・学校紹介
- ・南海トラフ巨大地震について  
(予測・対応・対策)
- ・クイズ (A or B)
- ・質疑応答

##### 広田小学校

～片方のクラス～

- ・学校紹介
- ・防災紙芝居
- ・〇×クイズ

～もう片方のクラス～

- ・海溝型地震の実験
- ・新聞スリッパ

## 反省

#### インプット

- ・もっと踏み込んだ内容を聞きたかった
- ・質問の用意が不十分だった
- ・人を選んで質問してしまった
- ・アンケートの項目が多かった

#### アウトプット

- ・防災知識がある相手にする内容ではなかった
- ・時間配分ができなかった
- ・間違ったことを教えてしまいそうになった

#### 全体

- ・ミーティングが少なかった
- ・参加率が低かった
- ・効率よく作業できなかった
- ・チームとして機能してなかった
- ・発表に対する準備ができなかった

○**兵庫県立舞子高等学校1** 今から舞子高校の災害メモリアルアクションKOBЕ最終報告会を始めさせていただきます。

活動目的は、「災害時、その人にとって最適な選択を取って後悔しないでほしい」。これは毎年同じ目標なんですけれども、なぜ同じなのかというと、災害はどこで起こるかかわからないし、そしてたくさんの方がいる中で同じように家の中にいるだとかいうわけではなくて、その人その人にとって最適な対応が違うわけなんです。最適な対応をしていてもある程度こうしておけばよかったとか、ああしてたらよかったなという後悔を少しでもなくすように、こういう目標を続けています。

活動の振り返りですが、2016年から大まかに去年までの説明をします。2016年、インプットは垂水駅のヒアリング調査、そしてアウトプットが今地震が発生したら？と想像してもらうという活動をしました。2017年、垂水駅と新長田駅でのヒアリング調査、アウトプットが明石市立衣川中学校での出前授業、そして2018年が卒業制作として「語り継ぐ」という冊子があるのですが、それを読んだり、ヒアリング調査をしています。最後にアウトプットですが、南あわじ市立西淡志知小学校と松帆小学校での出前授業を行いました。2019年、今年は防災訓練・垂水駅前でのアンケート調査、それから個人へのヒアリングを行いました。アウトプットが南あわじ市立西淡中学校、南あわじ市洲本市組合立広田小学校への出前授業を行いました。

○**兵庫県立舞子高等学校2** 今年のインプットはヒアリング調査とアンケート調査を行いました。

まず、ヒアリング調査についてお話しします。この調査では、神戸市立渚中学校の長山校長先生にお話を伺い

ました。長山先生は阪神・淡路大震災のとき、マニュアルを作っておらず訓練もしていなかったため無防備でパニックに陥った。また自宅が全壊し、住む場所がなくなったため何をしたらいいかわからなかったとおっしゃっていました。東日本大震災の被災地を見たときに、津波によって全てを流された街を見て、本当に辛いのは何もかもなくなることなんだなと思ったそうです。長山先生が次世代に伝えたいことは、命を大切にすることというのは今を大切に生きることだということです。生きていくことは何かしらの役目を持っており、その役目が何なのかを知るためには、何か行動を起こさないとはいけません。そして、その役目が何なのかを知り、精一杯果たせるといいなとおっしゃっていました。

○**兵庫県立舞子高等学校3** 続いてアンケート調査について発表させていただきます。今回私たちは11月4日に南あわじ市で、11月11日に垂水駅前でもアンケート調査を行いました。アンケートの内容としては、防災グッズを実際に準備しているか、また非常用持ち出し袋を実際に今家で準備しているか、家具の固定をしているか、もし南海トラフ巨大地震が自分の住んでいる街や職場で起こったときの、その地域の震度や津波の高さ、避難場所などを知っているかについてアンケートを行いました。実際にアンケートを行った結果がご覧の表になっております。

アンケート調査 結果

	南あわじ (25)		垂水 (16)	
	YES	NO	YES	NO
防災グッズ	13	12	5	11
非常用持ち出し袋	17	8	4	12
家具固定	11	14	13	3
震度	11	14	14	2
津波	10	15	7	9
避難場所	25	0	14	2



○**兵庫県立舞子高等学校4** アンケート調査では先ほどの表のように、問いについてイエスカノーかということでお伺いしました。そのほかにも幾つかお話を伺いました。南あわじ市と垂水駅の比較をしたときに、非常用持ち出し袋を用意しているかという話のときに、用意はしているけれども点検はしていない。だから用意していないと同じ状態だという方が垂水駅で2人、南あわじ市では持ち出し袋は用意していないけれども、自宅避難をするからそちらの用意はしているという方がいました。また南あわじ市では、津波がほとんどの地域に来ると言われています。しかし、何分後に何メートルというところまでは知らないという方が多くいらっしゃいました。垂水駅で聞いたときは、震度がどれくらいになると思いませんかということについては、阪神・淡路大震災と同じぐらいの揺れが来るんじゃないかと答える方が多く、実際想定されているのはそれぐらいなので知っているということになっています。また垂水駅でお伺いした人の中には震災経験がある方がとても多く、震度1でもその揺れを感じることは多く、怖いとおっしゃっていました。なので、もしも南海トラフ巨大地震が発生したときに、そのとき自分は恐怖に負けて動けないんじゃないかという方がいらっしゃいました。またどちらも共通して阪神・淡路大震災を経験した方のほうが用意をしっかりしている。また阪神・淡路大震災だけでなく、戦争や水害、そういったほかの災害なども経験しているとより備えをしっかりしているという方が多くいました。また中学生にも聞きましたが、そのときは多分親がやっているんだろう、でも自分はわからないと答える方が何人かいました。

ヒアリング調査とアンケート調査を総合した反省とし

ては、ヒアリング調査のほうは準備不足だということろです。自分で考えていた質問数が少なかったり内容が浅かったりして思うように質問したり聞きたい内容が聞けなかったという問題がありました。またアンケート調査では、簡単なアンケートで本来であればもっと早く1分程度で終わればよいものを六つも質問を作ってしまったために時間をとってしまったり、またアンケート調査のときに答えてくれそうな人を選んで質問してしまったため、もっといろんな人の意見を聞けたんじゃないかなというところが反省点です。

○**兵庫県立舞子高等学校5** 次は今年のアウトプットについて説明します。今年のアウトプットは、南あわじ市洲本市組合立広田小学校と南あわじ市立西淡中学校で出前授業を行いました。西淡中学校では、主に舞子高校の紹介と南海トラフ巨大地震について防災クイズを行いました。堅くなりがちな説明だったのですが、工夫を凝らしてうまく説明できたのでよく聞いてもらえたように思います。南海トラフ巨大地震についてですが、主に南海トラフ巨大地震の概要と被害想定と備えておくべきものについて説明しました。防災クイズでは、地震後の行動や防災の基本知識、災害伝言ダイヤル171や震災が起こるまでに備えておく物をAとBのどちらかを選んでもらう形で行いました。

○**兵庫県立舞子高等学校6** 続いては広田小学校で行った授業内容について説明します。大きくは二グループに分かれて時間で交代する形で行いました。一グループ目は防災紙芝居とクイズです。防災紙芝居では中に防災ラックのようなキーワードを赤字で入れました。最後にキーワードを確認したときには、小学生に対してなので聞き方を工夫してたくさんの子が覚えていて答えてくれ



ました。クイズは小学生が興味を持ってくれそうなものにしました。例えば「非常持ち出し袋の中にお菓子を入れてもいいのか」などです。二グループ目は海溝型地震の実験と新聞スリッパづくりを行いました。海溝型地震の実験での子供の反響は興味を持ってくれる子もいれば、まずまずの子もいるというような感じでした。新聞スリッパづくりでは丁寧に教えることも大切だと思いますが、時間が決められている場合は時間を守ることも大切だと感じました。また時間が余ってしまった場合には子供たちからの質問を受けたり、コミュニケーションをとれたので臨機応変に対応できたなと思います。また全体を通して広田小学校の子供たちは元気がよく反応もよかったですので授業がとてもしやすいと感じました。

○**兵庫県立舞子高等学校7** アウトプットの反省は大きく二つあります。まず一つ目は、西淡中学校での出前授業の際、準備時間が足りず、前日準備になってしまったり、授業内容が簡単になってしまいました。もう一つは、広田小学校で出前授業を行ったときで、事前準備がしっかりとできず、本番のときに時間配分をミスしてしまったり、防災授業ではあってはならない誤った知識を教えそうになってしまいました。

○**兵庫県立舞子高等学校8** 僕から全体を通しての反省を言わせてもらおうと思います。ここにあるように、まず恥ずかしい話ですが、チームとして機能していなかった、理由、ミーティングの数が少なかったり質自体がすごく悪かったり、意見が出なかったりして、まず内容以前の問題だったというのが、恥ずかしながら今回の反省になります。改善策としては早いうちから活動を開始することによってミーティング回数をカバーしたり、休憩時間をしっかりとって考える時間と休憩する時間を分けて集中

力アップを図ったり、計画的に行うことで作業の効率化を図ったりします。

これからやっていきたいこととして、これは僕個人の意見になってしまうのですが、僕は今三年生ですが、三年生で初めてメモリアルアクションKOBЕに参加させていただきました。未災者が未災者に伝えるということでは僕はその文言というか、そのメッセージはすごくいいなと思って今回参加させていただきました。実は昨日僕たちの舞子高校の近くにある兵庫県立神戸商業高等学校という県商と呼ばれているところで同じ高校生に対して授業を、僕とここにはいない環境防災科の生徒一人と防災環境科の先生と三人で行いました。最初は同じ高校生といっても防災はすごく堅いのでどうだろう伝わるかなと心配でしたが、僕がやった内容はクロスロードともう一人の子は避難情報のこと、その他のいろいろなことを先生がまとめてくださいました。同じ高校生だから伝わる場所があったようですごく反応がよくて一緒に考えて、その後このように前に行って僕が言いたいことを言わせてもらいました。そのときはすごい真剣に聞いてくれてそれこそメモリアルアクションKOBЕじゃないですけど、未災者だから未災者同士でわかり合えるというところがあるという話をしたら、めちゃくちゃ良い反応を引き出したので、来年度からこれをやるときは今回出前授業は小学校や中学校でしかやっていなかったの、同じ高校生に対してやっていってもすごくいいかなと思います。これで舞子高校の発表を終わります。

ありがとうございました。



# 関西大学

## 社会安全学部 奥村研究室



Graduate School and Faculty of Societal Safety Sciences **fss**

### 災害関連死の教訓

#### ～阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのか～

川崎 雄太 Yuta Kawasaki / 関西大学社会安全学部 3年

#### 背景・目的

阪神・淡路大震災では、直接、地震で命を落とさなくても、精神的ストレスや劣悪な生活環境によって失われる命があることが初めて広く社会に知られるようになった。災害関連死である。あれから間もなく24年が経とうとしているが、その後の災害でも、関連死は多く発生している。そこで、繰り返される関連死の発生状況を分析するとともに、阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのかを検証する。

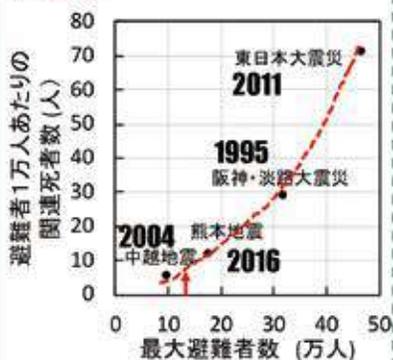


#### 手法

1) 阪神・淡路大震災以降の関連死の発生状況を最大避難者数の観点から分析する。(2) 関連死対策に関する文献を収集し、関連死発生に至るまでのプロセスをフロー図にする。(3) (2)のフロー図をもとに、草津市老上西学区の地区防災計画では、関連死を出さないために、過去の災害での教訓がどれだけ生かされているのか、また、どのような関連死対策が可能であるかを検討する。

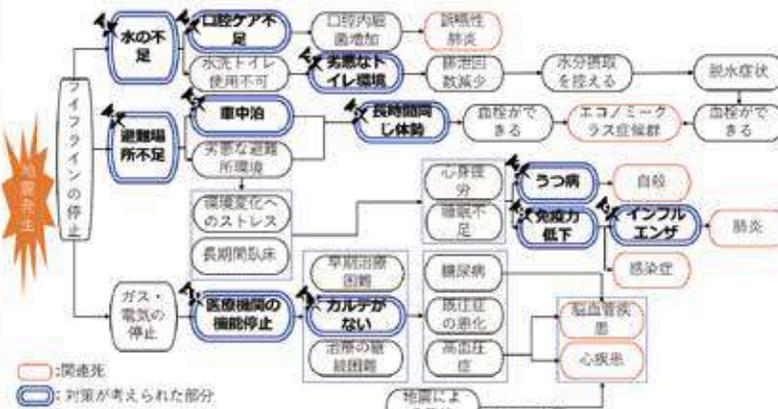


#### 結果



- 最大避難者数が多いほど、災害関連死の発生率が増加している。
- 赤の曲線と比較して、後に発生した災害の被害が小さくなっていないように見える。

→ 教訓が生かされているようには見えない



- 井戸のある場所の確認
- 水の備蓄の呼びかけ(学区→町内会→各家庭)
- 歯磨きシートの備蓄
- 水を使わずにはを磨ける歯磨きの備蓄
- 簡易トイレの備蓄
- 事前の避難スペースの確認(駐車場も含む)
- 適度な運動を呼びかける
- 1日に数回ラジオ体操を行う
- 避難者の不安、苦情を受けるシステムの構築
- 避難生活の中での「癒し」を提供する
- マスク、薬、除菌用アルコールを用意
- インフル感染者等を隔離する部屋の設置
- 医療機関のバックアップ体制を整える
- 避難袋へお菓子類、薬の明細を入れる
- 避難所に看護師等を配置

#### 結論

- 草津市老上西学区での地区防災計画では、避難場所不足という問題を解消するために、指定避難所以外に、学区で独自に避難場所の選定したり、災害が発生した際に、モノや資材等を融通し合うシステムの構築など、過去の災害での教訓が生かされている面もあった。
- 一方で、活用されていない教訓も非常に多く、本研究で整理した関連死発生のフロー図を活用したワークショップで、11の問題に対して、地区でできそうな対策が新たに提案された。
- 関連死の発生状況は、災害ごとに異なっているため、阪神・淡路大震災での教訓だけではなく、その後発生した災害で得た教訓も合わせて生かしていかなければならない。

#### 草津市 老上西学区 地区防災計画



#### 北風の防災から太陽の防災へ

社会安全学部 / 社会安全研究科  
総合防災・減災学分野 奥村研究室



○**関西大学社会安全学部奥村研究室** 関西大学社会安全学部の川崎雄太です。よろしくお願いします。僕は災害関連死について調べています。今回は阪神・淡路大震災での教訓は生かされているのかどうかということに焦点を置いて調べてきました。

背景としては、阪神・淡路大震災では、直接、地震によって命を落とさなくても、大きな精神的ストレスや劣悪な生活環境によって失われる命があるということを初めて広く社会に認知されるようになりました。それが災害関連死となります。あれから間もなく24年が経とうとしているということが背景としてあります。

この研究の目的としましては、その後、繰り返される関連死の発生状況を分析するとともに、阪神・淡路大震災での教訓というものは生かされているのかどうかを検証するというところにあります。

手法としましては、まず一つ目が阪神・淡路大震災以降の関連死の発生状況を最大避難者数の観点から分析するというものと、二つ目に関連死対策に関する文献を収集して、その内容を踏まえた上で関連死発生に至るまでのプロセスをフロー図に整理する。三つ目が草津市老上西学区の地区防災計画を対象にして、関連死を発生させないために過去の教訓がどれだけ生かされているのかというものを検証する。四つ目に二番で作成したフロー図をもとに老上西学区でどういった対策ができるのかどうかというワークショップを行ってもらいました。

まず一つ目の最大避難者数と関連死の規模について、最大避難者数が多くなれば多くなるほど関連死の発生率も増加しているということが見てわかると思います（P6結果の左図参照）。

赤色の曲線と比較しても後に発生した災害というのが小さくなっているのかということとそうではなくて、同じ一つの線上に乗っているように見えるので教訓というのが実際に生かされているのかどうかということ、生かされていないように考えられるのではないかと思います。

次に、文献リストをもとにして、まず阪神・淡路大震災で関連死に至るまでどういった苦労があったのかというのを整理しました。誤嚥性肺炎の原因を探っていくとまず水が不足していたということに原因があるのではないかと考えました。水が不足したことによる口腔ケアの不足です。歯磨きができないので、口腔内の細菌が増加して、それが誤って気管支に入ってしまうと誤嚥性肺炎によって亡くなれるというケースや、ガスや電気などがとまってしまって医療機関自体が停止してしまったことによって、既往症などが悪化したりして脳卒中や、心不全などになってしまうというケースと、避難場所が不足して

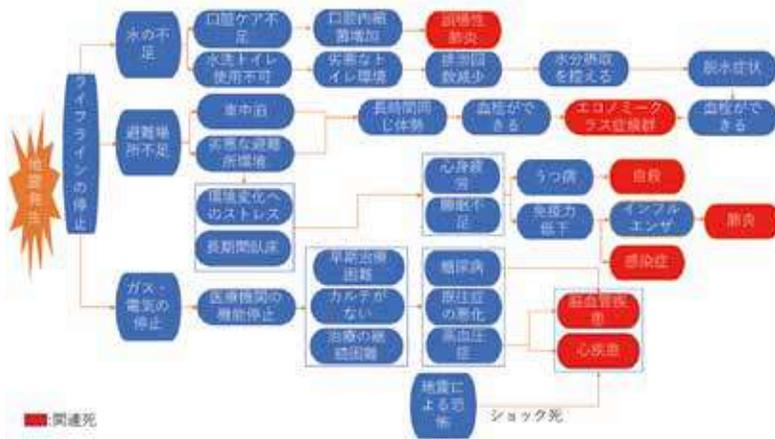
いたので避難環境自体が悪く、それによってストレスや、心身ともに疲労してしまったことによって鬱病になってその後自殺してしまうケースや、免疫力自体が低下してしまってインフルエンザになって、そのインフルエンザ関連による肺炎で亡くなれるということもありました。

次が中越地震の場合ですが、中越地震も医療機関自体がとまってしまって早期の治療ができなくなって、呼吸不全、脳梗塞などの病気にかかってしまって亡くなれるというケースや、車中泊によってずっと同じ窮屈な体勢でいるので血栓がたまってしまってエコノミークラス症候群になるということや、避難環境が悪くストレスがたまってしまって急性心不全や、呼吸不全などといった病気にかかって亡くなったり、体力が低下することによって免疫とかが下がってしまって呼吸不全だったり、肺炎といった病気になるというケースもありました。また避難環境が悪く、心身ともに疲労がたまって誤飲や心筋梗塞、病気とかによって亡くなれるというケースと疲労によっては病気だけではなくて、ある操作中、除雪処理の作業中に誤操作によって川に転落して溺死したという、疲労によっては、病気だけで亡くなるというわけではないということもわかりました。また中越地震の場合、ショック死というのも多く発生し、揺れによる恐怖や、ストレスによる心疾患や脳疾患によって亡くなれるというケースもありました。

熊本地震の場合もやはり医療機関の停止ということがすごく大きくて、初期治療が遅れて様々な病気にかかって亡くなったり、水の不足によりトイレとかも使えなくなってしまうので、それによってトイレに行く回数自体を減らそうと水分を摂取する機会自体を控えようとしています。すると、脱水症状になって体内の血液がすごく濃くなり血栓ができてしまってエコノミークラス症候群になるということや、中越地震と同様に車中泊などによって窮屈な避難環境を強いられてしまったことによって、血栓がたまってエコノミークラス症候群になるということもありました。熊本地震の場合は震度7の地震が二回発生し、余震もすごく多かったことにより恐怖や不安というのもすごく大きかったようです。突然死というものもあったそうです。

以上の3つの地震のフローをまとめたものがこちら（P8左上）になります。上から阪神・淡路大震災で多かった誤嚥性肺炎、熊本地震、中越地震で多かったエコノミークラス症候群、自殺は阪神・淡路大震災や熊本地震でも多く発生していました。インフルエンザ関連の肺炎は阪神・淡路大震災のもので、脳疾患や心疾患というものはさまざまな災害で起こっているというものがフローでまとめたものになっています。

# 関連死発生に至るプロセス



次が草津市老上西学区の被害想定としては、要点を絞ってお伝えすると、まず人口が8,478人、被害想定としては、これは琵琶湖西岸断層帯地震を想定しており死者としては20から30名ぐらいではないかと考えられています。避難者が1,600名から1,900名が学区内の避難者で、県内では12万4,767人と見込まれています。県内の避難者数というのが、P6結果の左図のグラフで見ると、最大避難者数が中越地震と熊本地震の間ぐらいなので、そのグラフを踏まえて考えていくと学区内での関連死は1から2名の桁ぐらいで、県内では60名、市内では13名だと考えられています。こちらの避難者数を現段階の指定避難所だけでは収容しきれないという事実もあります。

今の草津市老上西学区で考えられている地区防災計画には、主に避難所運営を手配する人、責任者の手配、各避難所の状況把握など、そういういったことが書かれてあります。

この地区防災計画と僕が先ほど紹介したフロー図を対比して教訓が実際に生かされているのかどうかということを考えていきます。実際に生かされているのではないかと考えた点が先ほども避難所が不足したことにより、結果的に病気になるって関連死によって亡くなるというケースがありました。その避難所不足というものを解消するために学区独自で指定避難所以外に避難場所というのを選定しているという点と、災害時に避難者のニーズを把握して物、資材、ジャッキとか、そういう資材とか融通し合ってお互いを助け合うというシステムが現段階で構築されています。実際、物とか資材とか具体的に何かというのがまだはっきりとは示されていないのが少し課題かなと感じています。教訓が生かされていないのではないかと考えたのが、先ほど上で教訓が生かされているという点で避難所増加というのを挙げましたが、避難所不足によって車中泊とかを強いられてしまってエコノミークラス症候群になるということが先ほどのフローで説明しましたが、対策として避難所を増やすというのはすごく有効なのではないか考えましたが、それ以外の関連死対策についてはまだ言及されていないのではないかと、教訓が生かされていないと思った点です。

次は実際に僕が先ほど作成したフローをもとに草津市老上西学区の方々にワークショップを行ってもらった結果をご紹介します（P6結果の右のフロー参照）。黒色のピンのところ番号を1から全部で11番まで振っています。赤色が関連死で二重丸の青色になっているのが実際に老上西学区で対策が考えられた部分になります。一応、関連死として7項目に死因がわかれていますが、その全てに対応して青色の草津市老上西学区でできるのではないかとこの対策が考えられています。

僕が個人的に気になった対策を紹介させていただきますと、水不足のところを出た対策が井戸のある場所を事前に確認しておけばいいのではないかとこの意見が僕は個人的にすごく印象に残ってまして、避難物資として水が届けられるというのは少し時間がかかってしまうので、事前に井戸とかある場所を知っておけば、自分たちで水というのを集めることができるとすごく有効なのではないかと考えました。あとはカルテだったり、医療機関がとまったときの対策として、避難袋にお薬手帳だったり、薬の明細を入れておけばいいのではないかとこの意見もすごくいいのではないかと考えました。阪神・淡路大震災のときにも、カルテがなくてどうしように処方していいのかわからないということがありましたが、お薬手帳や薬の明細とか入れておけば、いざというときにどういふ薬を処方していいのかという対処がすぐにできると思うので、すごく有効なのではないかと考えました。

最後にまとめとしては、関連死の発生状況というのが災害によって異なっているため、阪神・淡路大震災だけの教訓で対策しようとするのではなくて、その後に発生した災害での教訓もあわせて考えていかないとだめなのではないかと考えました。また僕が作成したフローというのが冬場に発生した災害という、ちょっと語弊がありますが、冷え込んだ時期に発生した災害が多かったため、夏場とかに災害が発生してしまうと、また違った問題が出てくるのではないかとこの思っているので対処仕切れない可能性があるのではないかと考えました。ですので、過去の教訓だけによる対策には少し限界があるのではないかと考えています。以上です。

# 兵庫県立大学+ 神戸市立渚中学校



災害メモリアルアクション KOBÉ2019 ポスター

## 兵庫の災害に関する記憶や記録を可視化、共有するための試み ～1938年阪神大水害の事例を通して～

兵庫県立大学+神戸市立渚中学校

### 阪神大水害概要

1938年（昭和13年）7月3日から5日にかけて、台風が襲来された梅雨前線が西日本に停滞し、神戸市を中心に集中豪雨が発生した。3日夕方から降り出した雨は5日の午後1時30分に降り止むまでに461.8mmの降水量を記録した。この総雨量が原因で六甲山の各所で土砂崩れが発生し、市域の河川が氾濫すると同時に、石井や瀧木、土砂の入り混じった土石流が神戸の市街地に流れ込んだ。神戸市における被災家は89,715軒、死者は636名と甚大な被害となった。この集中豪雨による凶悪の被害も含めて「阪神大水害」と呼ぶ。

### 背景と目的

このような甚大な被害をもたらした災害にも関わらず、水害から80年経った今残されている記録は、アナログ媒体のみであり、この災害に関する情報の収集と教訓の継承が必要不可欠となっている。

本取り組みでは、中高生を対象とし、語り部との対話の場やコミュニケーションや、それに基づく被災地フィールドワークを通じて、被災体験者の記憶や記録を次世代へと継承するためのデジタルアーカイブの構築を行なった。



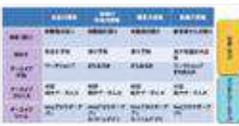
激流の流れる三宮駅前通り（神戸市中央区）



激流の流れる三宮駅前通り（神戸市中央区）

### 阪神大水害の記憶の継承の概要

国土交通省近畿整備局第六甲防犯事務所（以下、六甲防犯と略す）との協働で実施したワークショップやフィールドワーク（まちあるき）で、この水害の経験者や伝承者の口述によるコミュニケーション（インタビュー）について説明していきます。



GISアプリケーション

デジタルアーカイブの広域のプロセス

(1) 各流域におけるワークショップの実施概要

**新湊川流域（神戸市長田区）**

日時：2018年7月31日  
対象：神戸市立女子高等学校 生徒会  
新湊川流域の生徒会では長田神社の宮司さんご指導により、神社境内の過去の写真の被災位置を特定し、被災時のエピソードとともに被災地に書き込んだ。

**住吉川流域（神戸市東灘区）**

日時：2018年7月31日  
対象：神戸市立住吉中学校 生徒会生徒5人  
住吉川流域に位置する住吉中学校で阪神大水害の勉強会を実施した。講師は六甲防犯が派遣した砂防の専門家であった。生徒たちは阪神大水害の概要や当時の被害の様子などを学び、住吉神社の宮司さんへのインタビュー内容を考えた。考えた内容に基づいて、宮司さんに当時の被害の状況、経験したことやその感想などをお聞きすることができた。宮司さんの話す内容のうち、必要なものについては事前に準備した住吉川、住吉小学校周辺を含む被災地に書き込んだ。

**新生田川、宇治川流域（神戸市中央区）**

日時：2018年8月1日  
対象：神戸市立渚中学校 防災ジュニアリーダー生徒  
事前に六甲防犯が当時小学生だった経験者に対してインタビューを行った。インタビューの内容は水害当日の様子、学校から家に避難する時の光景などであった。渚中学生的な視点として、その経験者が当時たどった小学校から自宅までの道のりを歩いた。また、神戸市中央図書館で調覧区千春川から瀧石屋川間にある流域ごとに撮られた当時の被災状況の神戸大水害絵巻物を見学した。

**扇川流域（神戸市東灘区）**

日時：2018年8月8日  
対象：神戸市立渚中学校 防災ジュニアリーダー生徒  
防災ジュニアリーダーの生徒は2チームに分かれ、流域の南北それぞれを担当し、過去の写真の位置を特定するためのまちあるきを実施した。北側のまちあるきでは「神戸アーカイブ専員講座」講師では「被災者支援」に尽力のまちづくり協議会に協力をお願いした。生徒は過去の写真をとらえながら実施し、当時と同じ位置からの写真を撮影し、インタビュー内容を記録した。また、スマートフォンでGISのアプリケーションを用いて、電子地図上に写真と共にエピソードを入力した。

### 取り組みの意義

**被災者の記憶の継承**

語り部や被災者や伝承者の口述やインタビューを通じて被災者の記憶や経験をデジタルアーカイブとして保存

**災害現場の再現**

被災者や伝承者の口述やインタビューを通じて被災現場の再現やGISアプリケーションを用いて被災現場の再現

**デジタルアーカイブの活用**

デジタルアーカイブを通じて被災者の記憶や経験を次世代へと継承

**被災地に関する情報共有**

被災地に関する情報を広く共有し、防災意識の向上を図る

### まとめ

災害など過去に起こったことに向き、そこから教訓を引き出し、社会的な記憶として保存、継承することは重要である。渚中学校などの中高生を対象にしたまちあるきやワークショップを実施した。構築のプロセスの中、高生が参加することは、阪神大水害の記憶と記録を次世代に継承することの「次世代に継承する」という趣旨に合致し、教育的にも意義深いと考える。

### デジタルアーカイブが公開されました

本取り組み、また、一般から寄せられた写真、体験談などは、どなたでもインターネットから自由に閲覧できるように「阪神大水害デジタルアーカイブ」として保存し、11月24日に一般公開されました。以下の添付が阪神大水害デジタルアーカイブのホームページです。

<http://www.kkzshu.go.jp/ai/index.php>



○**兵庫県立大学** 兵庫県立大学と神戸市立渚中学校の発表を行いたいと思います。

まず1938年の阪神大水害に係る事例を取り上げます。阪神大水害の概要は、1938年7月3日から5日にかけて雨が降って、神戸市、阪神間、六甲山系が崩れ、神戸市、阪神間における各流域で氾濫が起き、市街地に被害を及ぼしたという災害になっております。死者は700名近くで15万戸の被害が起きました。これは兵庫区と中央区の写真（P9左上写真参照）になっており、海と化したように見えると思います。

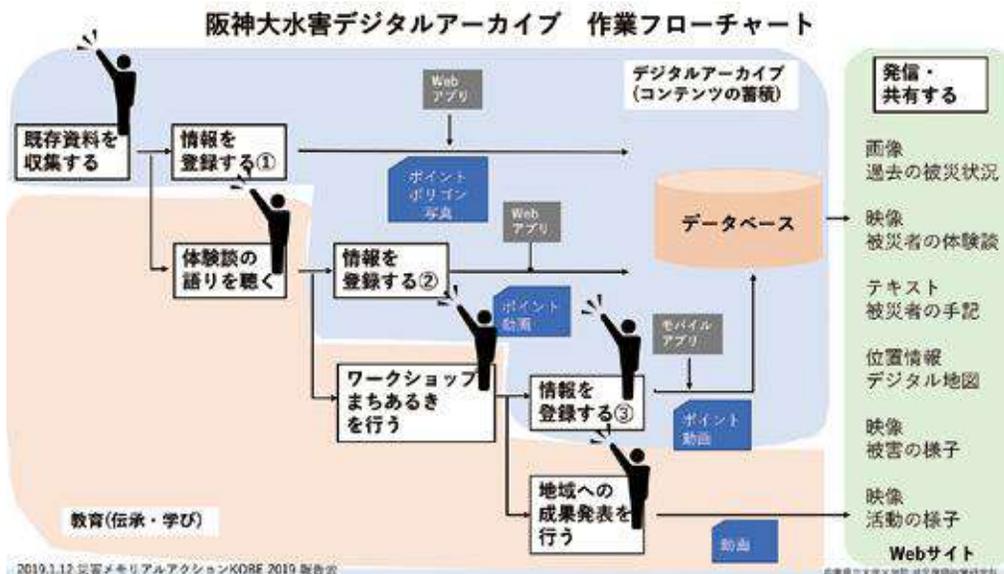
成果物の発表をさせていただきたいと思います。六甲砂防事務所のホームページにリンクがありますので、すぐに見いただけます。このデジタルアーカイブは電子上の図書館という形で作成してまして、一つ目に当時を経験された方のインタビュー、このインタビューはYouTubeとリンクしていますのでクリックしていただくと、当時経験したことなどがご覧いただけます。11分ぐらいあるんですけども、当時の雨の様子や経験したことなどが出ています。この次に手記、体験談などが記述されています。その次にエピソードということで、去年でしたら家のところに当時の芦屋川の橋の柱が見つかったとかいう新聞の記事も出てきます。そして写真などがあり、最後に当時流れていた動画などが載っております。

各流域における写真を地図上にまとめたもので「阪神淡路大水害80年デジタルアーカイブMAP」というものがあります。そのMAPの写真には場所の情報や、その場所におけるエピソードが載っています。写真をクリックしていただくとその場所に飛んでいったり、またこの場

所にはどういう写真があるのかと地図のほうからクリックしていただくと、写真の情報が出てきたりもします。全体の方は右側にブックマークがあり、流域ごとに飛ぶということもできます。当時の神戸市の地図を見るとポイントデータとして、その情報を押していただくと写真とエピソードを見ることができます。水色の表示の所は、1938年阪神大水害で神戸市における被害の浸水した範囲になっております。黄色の表示の所は写真でも場所のポイントがわからないというのもあるので、ここかなというふうに付与しております。

この取り組みを行うに当たってどういうふうに活動してきたかということですが、住吉川、生田川などの5流域を行いまして、渚中学校、中高生の方が聞き手となり、アーカイブの手段としてまち歩きや、ワークショップなどを通じて取り組みを行ってきました。これに関係するフローチャートは下記のとおりでメインとしては教育の場を作っていきたいということで、左下の教育（伝承・学び）などを重点に行ってきました。そこに渚中学校の方々が参加されて教育の場として構築していきました。写真・地図を見ていただくと生田川のほうでは暗渠が少ないとか、当時の社会的な状況なども見ることができます。阪神大水害を機に国としてハード事業が必要だろうということで堰堤などが作られてきました。

ここからまた流域でのやったことなんですけれども、住吉川では本山、住吉神社で経験された宮司さんなどのインタビュー、ワークショップを通じてお話をしました。湊川では当時経験された方のインタビューをYouTubeで聞き、その経験された方の小学校から自宅に



帰るルートを実際に歩きました。都賀川では写真などがたくさんあったので、その写真の場所は今はどうなっているのかということでもち歩きを行いました。今から渚中学校の方が実際に取り組んだ動画を流しながら感想を一言ずつ聞いていきたいと思っております。ではよろしくをお願いします。

○**神戸市立渚中学校1** 僕は夏休みに生田川の調査を行いました。高低差のある土地が被害の大きい場所と小さい場所を分けたことが今も変わらない現在の地形を実際に歩いてみてわかりました。当時の状況を知っている人の話を聞いて、その方の行動を再現して僕は友達を背負って歩きました。人を背負って歩くだけでも大変でしたが、水や泥の中を歩くということはさらに大変だったと思いました。

○**神戸市立渚中学校2** 私は今回のプログラムで初めて阪神大水害を知りました。いつもは考えないことを考えることで水害が起きたときに、まずどうすればいいのか、どんな準備ができるのかを学ぶことができました。特に実際に外に出て周りの地形をよく知っておくことが大切だと思いました。阪神大水害を経験した人の記憶を私たちを通して少しでも多くの人に伝えていきたいです。

○**神戸市立渚中学校3** 私たちは都賀川流域へ行きました。主に、昔の写真をもとにして現在どのような場所になっているのかということを調べました。山の稜線などを参考にして探しました。見つけたときに面影が残っているところや新しい場所が変わっていたりするのを見て少し自分の街に対する見方が変わりました。そして何より都賀川の川幅や深さが変わっていることに驚きました。やはり阪神大水害は本当に大きな被害を及ぼしたのだなと感じました。

○**神戸市立渚中学校4** 私はこの調査を通して教訓の大切を改めて感じました。その理由として大きいのが調査

の後に見た若宮八幡宮にある水害記念碑です。そこから水害を忘れるなという昔の人の強い思いが伝わってきました。それと同時にこの水害の記憶と教訓のバトンを繋ぐのは私たちの努力にかかっていると感じました。二度とこのような水害を起こしてはならないという教訓を忘れず、日々の活動により一層精力を尽くしたいと思えます。

○**神戸市立渚中学校5** 阪神大水害は神戸市民に大きな影響を与えた忘れてはならない災害です。災害地調査を通じて一見当時とは風景が変わっている場所も災害の痕跡や教訓が残っていると知りました。この調査で学んだ水害の知識と対策を私たち渚中学校防災ジュニアリーダー60人で共有し、今後の活動に生かしていくと同時に多くの人に伝えていきたいと思えます。また水害で多くの人々が被害に遭い、そこから学び、今の都賀川があるので、私たちが伝えていかないと人々の記憶から忘れ去られてしまい、この学びが無意味になってしまうかもしれないので、自分たちでその学びを無意味にならないようにしていきたいです。

○**兵庫県立大学** 渚中学校の方、ありがとうございます。次に、新湊川ではこのような取り組みを行っていかしました。そして神戸新聞にも掲載していただきました。古地図を活用することで当時のことと今の状況もわかるかと思えます。モバイルのアプリも活用していかしました。デジタルアーカイブの構成としては、電子上の図書館という形で作っていかしています。

まとめです。本取り組みの意義ということで四件あるかなと思えました。一つは、80年前の災害ということなので、紙媒体のものだけしか残っていないという状況なので、これをデジタルアーカイブとして長期的に保存することができると思いました。二点目、コミュニケーションの場を作ることができ、90歳近い方から、貴重な



情報が今回得られたと思います。三つ目、場所が教えてくれること、これは地図と災害を組み合わせることで曖昧な空間であったりとかを、そこから見られることがただ単に見られることではなく地図と写真を付与することで分かることがあるんだなと感じました。四点目は、情報に対して責任感を持つということで、今までだったらただ単に語りを聞いているだけということもありましたが、次につなげるということもあったので責任感が生まれて、そこから自分たちが発信できることもあるのではないかと考えております。

最後に、災害メモリアルアクションKOBÉということで、震災を体験していない人が震災を体験していない人に伝えるということはどういうものなのかなと考えてみたところ、まずこの取り組みは経験者が体験されたことを我々が継承していくという取り組みを行ってきましたが、同様のプロセスを通じることでデジタルアーカイブを構築することで、次の世代に伝えていくときに、僕たちが経験者の役割を担ってまち歩きやワークショップなどを通して次の

世代に伝えていく取り組みができるのではないかと、またデジタルアーカイブにより、電子上の記憶や記録として残すことができるのではないかと考えました。

以上で、兵庫県立大学と渚中学校の発表を終わります。ありがとうございました。



# 国立明石工業高等専門学校

## D-PRO135°(明石高専防災団)開発チーム



RESQ

# D-PRO135°

## 明石高専防災団

チャレンジ!

### 防災ボードゲーム RESQ

What is RESQ

「RESQ」は共助をテーマに、高いゲーム性や学習性を持つ防災ボードゲームです。たくさんの方々に遊んでいただけるよう、ホームページから必要なものは全て印刷でき、誰でも簡単に遊べます。

ゲームをダウンロードし、印刷したものを切り貼りして「つくる」。  
ゲームを楽しんで「あそぶ」。  
防災についてたくさんの方々のことを「まなぶ」。  
RESQはこの3つの要素を基本としています。



### ゲームの体験イベント

Experiential Event of the Game

これらのゲームが完成して以降、各地で体験イベントを実施してきました。その様子をご紹介します。

#### RESQ

学内に限らず、小学校やイベントにおいて地域の方々や子どもたちを対象に開催してきました。参加者の方々には「子どもたちだけでなく大人も楽しめた」「防災に興味を持つきっかけになった」といった感想をいただいています。また、遊ぶ中でいただいた意見や感想を参考に現在も改良を重ねています。



2017 西日本 B-1 グランプリin 明石 体験コーナーにて



淡路で開催された「防災・減災メッセ」にて



明石高専での展示にて



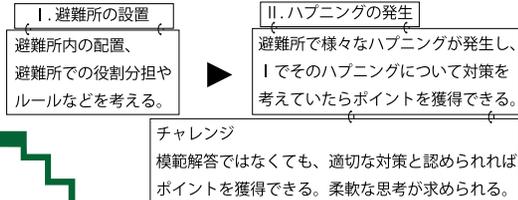
小学生を対象に地域の自治会と共催

### 避難所運営ゲームチャレンジ!

What is CHALLENGE!

「チャレンジ」は、避難所運営について仲間と相談しながら考える、シミュレーション型の避難所運営ゲームです。実際にある施設を舞台にし、そこを利用する人々を対象としたローカルな目線でのゲーム作りに挑戦しました。ゲームを実施する場所を舞台にしたり、地域特有の課題を想定して行えます。また、非常時に大切な臨機応変性や現場対応力も試されるゲームとなっています。発案：太田敏一先生 協力：鳥居宣之先生(神戸高専)

#### ゲームの実施方法



#### チャレンジ!

神戸高専にて3年生 250名を対象に、2日間に渡って実施しました。1日目は避難所についての知識を深めるため、阪神淡路大震災の被災者の方から実際に話を聞き、実際の避難所の様子を学びました。2日目は実際にゲームを行いました。神戸高専が避難所になったときのことを想定し、一班10人ほどで避難所の運営について話し合い、次々に起こるハブニングへの対応策を考えました。体験した学生からは「避難所運営という視点で、防災について学べた。」「災害時、避難所を運営する側にまわりたいと感じた」といった感想をいただきました。



1日目：講演会



2日目：チャレンジ!実施

### 情報発信

Informations



#### Twitter

日々の活動のお知らせなどの内容を投稿しています。もっとも更新頻度が高いので、最新情報はこちらをご確認ください。



D-PRO135°(明石高専防災団) @135\_d\_pro



#### Facebook

基本的な投稿内容はTwitterと同じですが、写真や文書はこちらの方がより詳しいものになっております。



明石高専防災団 @4.pro135.a



#### HP

組織概要やゲームの詳細内容などを掲載しています。RESQのデータダウンロードもこちらから可能です。



D-PRO135°ホームページ https://d-pro135.github.io/home/

### 私たちの活動

About D-PRO135°

2015年夏、明石高専生によってD-PRO135°(明石高専防災団)が誕生しました。1年次の必修科目「防災リテラシー」を経て、防災士資格を取得した学生の有志が集い、「防災知識の普及」や「防災意識の向上」を目的に様々な活動に取り組んでいます。



### ○明石高専D-PRO135° (明石高専防災団) 開発チーム1

皆さん、こんにちは。明石高専防災団D-PRO135°の塩坂です。私からはD-PRO135°が開発したゲーム開発についての発表を行っていきます。

まず初めに、D-PRO135°の簡単な紹介から行います。D-PRO135°は明石高専の授業内で防災について学び、そのステップアップとして防災士の資格を取った学生が2015年に発足した防災団体です。発足から現在に至るまで幅広い活動を実施しています。現在はゲーム開発と地域連携を主な活動として今年度には30人以上が所属する団体までになりました。

では、これからゲーム開発の説明に入っていきます。これまでの活動紹介の後、今後の活動について話していきたいと思います。

最初にこれまでの活動についてです。一つ目が防災ボードゲームRESQについてです。RESQとは2016年の夏に完成した共助をテーマにした防災ボードゲームのことです。学校や地域のイベントなどで体験会を開催いたしました。その中でルールや難易度についての課題、遊び方のアレンジなどの要望が多々ありました。この二つの写真は実際にRESQ体験会が開かれた写真です。明石高専では11月に高専祭というものが開かれるのですが、そこにもRESQを展示し実際に体験してもらいました。



RESQの体験会では様々な意見が出ました。その中で小学生以下の子供では、ゲームは楽しいがルールや言葉が難しい。逆に中学生以上になるとおもしろい、楽しいといった意見が出ました。

二つ目に、チャレンジ!についてです。チャレンジ!とはチームで競いながら避難所運営を疑似体験できるシミュレーションゲームです。9月には神戸高専の防災授業で実施し、ルールや質問の改善に明石高専のD-PRO135°が協力しました。そのチャレンジ!の改善例が、「身近に感じるようする。」「学生が出したアイデアを無駄にしない。」「ゲームの進行をスムーズにできるようにする。」の三つです。以上がこれまでの活動です。続いて今後の活動に入っています。

### ○明石高専D-PRO135° (明石高専防災団) 開発チーム2

続いて、これからの活動について紹介します。ゲーム開発としてRESQの改善・応用をメインに取り組みます。今のRESQは、D-PRO135°のメンバーの解説がなくては難しく取り組みづらいところがあります。なので、ルールブックの文言や形態を改善することでD-PRO135°のメンバーの解説がなくても遊べるように改善します。そうすることで小さな子供からお年寄りまで幅広い方に遊んでいただけるゲームを目指します。二つ目は、遊び方の応用です。今のRESQはアレンジが不可能で地震による津波や土砂災害等の対応ゲームとなっています。なので、災害にあったマップの地形、施設、道に変更できるようにし、地震以外の災害にも対応できるようにアレンジを考案していきます。そしてアレンジを通してより多目的なゲームを実現させます。より多目的なゲームを実現させるため、昨年12月27日に芦屋市市役所にて職員の方々と逃げ地図WS研修を行いました。逃げ地図WSとは、目標避難地点までの時間を色鉛筆で塗り分ける手作りの地図のことです。一本、一本の道路ごとに手作業で色を塗り、それによって地形、形状、時間がリアリティーを持って埋め込まれていきます。地図上の全ての道路に色を塗っていくことでふだん使う道だけでなく、余り使わない道に目を向けることができますし、また個々の道を地域全体の道と交互に見ることで生活圈全体を把握することができます。今後は逃げ地図を活用し、RESQに応用させるほか、新ゲームの開発もあわせて行う予定です。

ご清聴ありがとうございました。



# 国立明石工業高等専門学校

## D-PRO135°(明石高専防災団)地域連携チーム



# D-PRO135°

## 明石高専防災団

Twitter: D-PRO135°[明石高専防災団]  
@135\_d\_pro

2019 / 1 / 12

Facebook: 明石高専防災団  
Facebook.com/d.pro135.e

### D-PRO135°ってなに？

WHAT IS THE D-PRO135°?

2015年、防災士資格を持つ学生によりD-PRO135°(明石高専防災団)が誕生しました。発足から現在まで幅広い活動を実施し、本年度は地域連携とゲーム開発を主な活動としています。

2019年現在では31名の学生が所属しており、地域の防災活動への貢献や学内での防災意識の向上に努めています。

### 活動報告

#### RESQ体験会 in 魚住

明石高専のある魚住町で、D-PROとしては初の交流となりました。明石市魚住まちづくり協会と協力して、学生が開発した防災ポードゲーム「RESQ」を魚住のこどもたちに体験してもらう機会を設けました。この活動では「RESQ」について多くの意見をいただき、今後の活動の参考になりました。

#### 東二見減災まちづくり

今年度は、昨年度取り付けた感震ブレーカーの不具合等の問題解決に、企業と協力して取り組みました。

他にも、「防災寺子屋」という子供世代に向けたイベントを開催し、D-PROの活動をさらに広めることができました。

#### 高専祭展示

11月末に開催される高専祭(学際)では、D-PROの展示を行い、一般の方々に活動を知ってもらうことができました。RESQ体験ブースでは家族で楽しんでいただくことが多く、幅広い層の意見や感想が集まりました。

また同時に、北海道胆振東部地震の募金活動も行いました。



### 今後の活動

#### 明石地域の防災意識の向上

主にRESQ体験会をツールとする、地域全体の防災意識の向上への貢献  
D-PRO135°を経由した防災ネットワークづくり  
(魚住、二見、江井島etc.)

#### 東二見地蔵町での活動

「防災寺子屋」の改善、定期的かつ継続的な開催  
祭り等の行事でブース出展参加  
二見小学校の特別授業でRESQを実施

## ○明石高専D-PRO135°（明石高専防災団）地域連携

**チーム** D-PRO明石高専防災団です。私からはD-PROの活動の一つである地域と連携した活動について報告させていただきます。よろしくお願いします。

まず昨年8月に、明石市の魚住地域でD-PROが開発した防災ボードゲームRESQの体験会を行いました。魚住地域というのは、明石高専と最も近いというか明石高専が位置している地域になります。D-PROを通して交流というか、防災でかかわっていくというのはこれが初めての取り組みでした。RESQについても多くの意見をいただき、双方にとって大変有意義なイベントになったと思っています。また11月の初めには明石市魚住地域で明石高専の高専祭を行って、そこで展示を行いました。RESQの体験ブースやD-PROがふだん活動している内容のポスター展示などを行いました。また、北海道胆振東部地震募金の呼びかけも行いました。

次に今年度も一昨年度から継続している東二見地域での減災まちづくりに取り組みました。昨年度、東二見地域に住む災害時要援護者に対する取り組みとして、地震が発生したときに起こる通電火災を防止する感震ブレーカーという防災器具の取り付けを行ってきました。しかしながら、今年度に入ってその感震ブレーカーの不具合が起こったお宅がありまして、その問題解決に実際にその感震ブレーカーを作っているメーカーの方と協力してあたりました。器具についての意見交換を行ったり、取り付けに際してのアドバイスをいただいたりしました。そこでD-PROの学生内で取り付けの際のお宅への十分な説明や取り付け後の点検、アフターケアなどの必要性をD-PROの学生内で再確認しました。

今年度の11月に「防災寺小屋」と銘打ってD-PROの学生が今まで学んできた防災の知識を、いわゆる寺小屋のような形で子供たちに教えるというイベントを開催し

ました。昨年度までは東二見では、先ほど説明した要援護者など高齢者に対する大人世代に対する取り組みというのが大変多かったのですが、地蔵町には小学生も多く、子供世代の防災の知識や関心を高めてもらうことで地域の防災意識の底上げを図れるのではと考えまして、このような取り組みを始めるに至りました。第一回は先ほども説明したようにRESQの体験会を行いました。地蔵町の子供たちと触れ合うのはこれが初めてで防災に関して興味を示してくれるかどうか不安ではありましたが、ボードゲームということもあり、参加してくれた子供も大人も夢中になってRESQで遊んでくれました。またゲームの最中には小学生から防災に関する質問をされることもありました。この活動はD-PROの学生にとっても今まで学んできた、得てきた知識をアウトプットできる場になっていると感じました。それと同時にこの地域の小学校では、阪神・淡路大震災や防災についての特別な授業を行うことはとても少ないというか、ないこともあるそうです。そういうことも聞いてこの地域の子供たちに防災について知ってもらうことの必要性をとっても感じました。子供たちだけではなく、その保護者の方にも参加していただいたイベントになっていて、当初の狙いどおり子供からは広がっていくというか親子で参加することで、防災寺小屋に来た子供たちからその保護者や周りの大人へ防災意識が広がっていくような、そういう兆しが見えたイベントになっているかなと思います。

次に、今後の活動について説明させていただきます。まず、魚住地域で行ったようなRESQの体験会や、東二見地域で行った防災寺小屋という活動をほかの地域でもしていくことによって、明石市全体の防災意識向上に貢献していきたいと思っています。明石市は阪神・淡路大震災で大きな被害を受けたという地域が少なく、特に明石市の西のほう、東二見地域や江井島、魚住地域とい



うのは本当に大きな被害を受けたというお宅は少ないです。そこで南海トラフ巨大地震や防災に対する意識が薄いということが現状になっているので、先ほどの東二見地域の小学校は避難訓練を行うことはありますが、防災について特別な授業を行うことはないということなので、阪神・淡路大震災を風化させない形の一つとして明石市のように大きな被害を受けていない地域でも防災の啓発を行うことで次の災害への備えにつなげていけるのではないかと考えています。

そして、このような防災啓発をD-PROが明石市の各所で行っていくことで、新しく防災について何か取り組みを始めたいと考えている自治体や企業が、それに対して取り組みを始めやすくなったり、自治体同士で互いに防災意識を高め合うきっかけづくりになるような防災ネットワークづくりに貢献していきたいと思っています。まだ防災ネットワークづくりは具体的なことは考えられていないのですが、明石市でもこの神戸市と同じように防災について自治体や企業が協力していけるようなそういう場とか仕組みができればと考えています。

それから東二見、地蔵町での防災寺小屋はさらに発展させていきたいと思っています。第二回以降も非常食や、避難所での暮らし、応急処置などについて、今までD-PROの学生が学んできたことを子供から大人まで楽しく学べるような内容を検討して開催したいと思っています。

ます。また、地域のお祭りに参加してRESQの体験ブースが出店できるというお話とか、小学校での特別授業にRESQの体験を盛り込んでいただけるというお話もいただいているので、より一層地蔵町の方々と連携をとった指導を行っていく予定です。

ご清聴ありがとうございました。



# 神戸学院大学

## 現代社会学部社会防災学科安富ゼミ



### 災害メモリアルアクションKOBЕ 2019 「阪神淡路大震災の教訓って？」第3弾

神戸学院大学 / 現代社会学部 / 社会防災学科 / 安富ゼミ



#### インタビュー

昨年度の活動では、地域によって震災への意識、教訓の違いがあるかについて調べるために街頭インタビューを実施しました。今年度は、「行政」「マスコミ」「研究者」などといった専門的な知識をもった方々にインタビューをさせていただき、昨年度とはまたちがった視点から震災の教訓について調べていきました。



インタビューにご協力いただいた方々、ありがとうございました！



インタビューは、学生が二人一組となって対象者にアポイントを取り、実施しました。

インタビュー対象者の中には、今もお防災の第一線で活躍されている方はもちろん、震災当時現場で活躍されていた方など、幅広い方々にご協力いただきました。

期間は7月下旬から12月下旬の約五か月の間で、合計27の方々にインタビューをさせていただきました。

#### 新聞作成

今年度は、インタビューにとどまらず、「発信」にも力を入れ、神戸新聞社が提供するクラウド型アプリ「ことまど」を利用し、新聞を作成しました。昨年度では、阪神・淡路大震災の教訓は正しく継承されていないという結果にまともったため、正しい伝え方を模索する一つの手段として新聞を選びました。

また、教訓のみについて書かれた新聞は珍しいと思います。新たな切り口で教訓を継承していきます。「ことまど」は、小学生が学校で新聞作成のために利用するアプリです。簡単に、本格的な新聞を作成することができます。

新聞名は、「わせらん新聞」としました。「わせらん」とは、淡路島の方言で、「忘れない」を意味します。インタビュー得た教訓とは何かの答えを、全部で9枚の新聞にまとめることができました。



Kobegakuin University

神戸学院大学

-----Member-----

教授 安富 信

3年 長井 裕貴 寺井 美紀 林 修功  
東 萌菜美 森脇 稔喜 森 達也 巽 翔  
岡崎 琳太郎 池内 麻菜美 池上ひなの  
土居 大輝 寺尾 莉子 川口 祐生

ポートアイランドキャンパス 〒 650-8586 兵庫県神戸市中央区港島1-1-3

☎078-974-1551

### ○神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ1

神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミの3年、林修功と川口祐生、池上ひなのが発表させていただきます。安富ゼミとして災害メモリアルアクションKOBEのプロジェクトに参加して三年目になります。先輩方が取り組んできたテーマ「阪神・淡路大震災の教訓は本当に伝わっているのか?」を受け継ぎ、新たに新聞づくりに挑戦しました。

今年度の活動の流れとしては、4月からインタビュー対象者を決定し、インタビューを始めました。そして11月23日の中間発表でそのインタビューした中から幾つかの教訓を共有させていただきました。そして12月下旬に新聞を制作しました。また、継続してインタビューを実施いたしました。

昨年度は一般市民のみの対象で街頭インタビューをしてきましたが、今年度からはインタビュー対象の幅を広げ、新たに行政、民間、マスコミ、研究者、災害医療関係者へのインタビューを試みました。質問はシンプルに、「阪神・淡路大震災の教訓は現在まで生きていますか?」というものです。人それぞれ経験したことや感じるものが違ってくると同じように自分の中で最も伝えたい教訓は違ってきます。インタビュー対象の幅を広げる狙いとして、さまざまな視点から見た教訓、専門的な教訓、経験から言える教訓を拾い上げるとともに、今まで継承されていなかった新たな教訓を発見できることを期待していました。

### ○神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ2

これまでに約30名の方々からインタビューをさせていただきました。今日はその一部を紹介します。まず一人目が、人と防災未来センター長の河田恵昭さんにインタビューさせていただきました。河田さんは、教訓を伝える側と受け取る側の意識の違いについて指摘されました。「23年前に阪神・淡路大震災が起こってたくさんの教訓が生まれ、被災地の色々な方が努力されて教訓を残して伝えようとしている。しかし受け手である被災地以外の人々が自分のことと思っていないのが現実である。他人事と思わずに教訓をどのように生かしていくか、それをどうやって日々の生活の中で使ってもらうかを考えることが非常に大切だ。」と話されていました。また、「教訓をまとめることも大事だがその教訓を今の時代でどう生かすことができるのかを考えていくことがもっと必要だ。」ともおっしゃっていました。

続いて二人目は、NPO法人よろず相談室の牧秀一さんにお話を伺いました。よろず相談室とは、阪神・淡路大震災の復興住宅の訪問や震災障害者の集いを行う神

戸のボランティア団体です。牧さんは「阪神・淡路大震災の教訓は正しく伝わっているか?」という問いに対して、「全く伝わっていない。」と答えられました。「阪神・淡路大震災の避難所生活、仮設住宅、復興公営住宅での教訓が東日本大震災の被災地域には全く伝わっておらず、自治体も住民も一から模索する状態であった。」と具体的な例を挙げてお話してくださいました。また、「現地住民の方からは成功事例だけではなく、失敗事例も教訓として伝えてほしいという声を多く聞く。」とおっしゃっていました。「教訓が伝わらない原因は何か?」という問いに対しては、「教訓を受け取る側がどうしても他人事と捉えてしまうことだ。」とおっしゃっていました。また、牧さんは「過去の教訓をもとに未災世代に具体的な対策を主体的に考えさせることが大切である。」と話されていました。「そのためには学生のうちから、災害ボランティアなど経験して被災者の方と出会って話をしてほしい。」とおっしゃっていました。

次はインタビュー内容をもとに新聞を作成していきました。神戸新聞社が提供するクラウド型アプリ「ことまど」を利用して新聞を作成しています。今年度はインタビューにとどまらず、発信にも力を入れていきます。昨年度は阪神・淡路大震災の教訓は全く継承されていないという結果にまとまったため、正しい伝え方を模索する一つの手段として新聞を選びました。

また、教訓のみについて書かれた新聞は珍しいと思います。新たな切り口で教訓を継承していきたいと利用するアプリです。新聞の作り方も簡単に内容を易しくすれば子供でも読むことができるような内容になっています。

### ○神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ3

私たちが完成させた新聞は今皆さんの手元にあると思いますが、1枚3人、計9枚、27人の人を紹介しています。皆さん、題名の「わせらん」という意味はご存じですか。知っている人がいればこの後一緒にお話したいなと思うぐらいなんです、この「わせらん」という意味は、私の出身である淡路島の方言で「忘れない」という意味で使われています。例としては、「今日、雨が降るから傘をわせらんように持っていきよ。」みたいな感じでいつもお母さんに言われていました。何でこの「わせらん」が採用されたのかというと、いつも私はゼミで淡路弁をみんなからいじられて何か新聞の名前を考えるとときもいじられて、一人が「何か淡路弁で何かいいのいないの?」と言われて、私は阪神・淡路大震災を忘れないようにという意味と教訓を伝えていきたいという意味を込めて、忘

れないを淡路弁で言いかえたら「わせらん」やとなって、「わせらん」という響きもいいかなと思って新聞の題名にさせていただきました。

まとめで印象に残った教訓を抜粋して読ませさせていただきます。

近藤さんは、「教訓集が力にならないと学んだことが大きな教訓だと思っている。単に書いたもので済むわけではなくて常に更新したり、鍛え直したり、組み替えたりそうする取り組みじゃないといけない。」とおっしゃっています。

金田さんは、「未災者が被災者に当時の震災のことを話してもらったりするような場はほとんどないし、自分で調べるようなこともないから伝えていくことは難しい。」とおっしゃっています。

矢守さんは、「災害には様々な要因があるため、対策をしてきたものとは全く別の原因で大きな被害が出るのが過去の事例でもあった。要するに教訓を学ぶことも大切ですが、学ばないということも大切だ。」とおっしゃっています。

川西さんは、「大学生には人のために動く以前に自分の命を守ってもらいたい。若いから生きられるとは限らない。人に貢献するには、まず、自分が被災することを想定すること。」とまとめられています。

震災の記憶を形に残るようにしたことは良かったと思います。

次に来年度の活動予定として、新聞を活かした活動、小学生向けの授業もできれば良いなと思っています。新聞を活かした活動としては、防災施設などに展示してもらったりして、多くの人に見てもらいたいということが挙げられます。小学生向けの授業は小学生にも読みやすく手直して、それを踏まえて防災授業などもできれば良いなと思っています。

ご清聴ありがとうございました。



# パネルディスカッション

## テーマ：今、私が伝えたい??こと

### 【コーディネーター】

● 関西大学 社会安全学部 准教授 奥村与志弘さん

● 防災デザイン研究会 GK 京都 デザイナー ト部 兼慎さん

### 【グラフィックファシリテーション】

● TAGAYASU 鈴木 さよさん

● 国立明石工業高等専門学校 5年生 多田 裕亮さん

### 【登壇者】

● 神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ  
長井 裕貴さん・巽 翔さん・教授 安富 信さん

● 国立明石工業高等専門学校D-PRO135°  
(明石高専防災団) 地域連携チーム  
竹谷 夏葵さん・助教 本塚 智貴さん

### ○司会 人と防災未来センターリサーチフェロー 辻岡さん

防災は総合的で広い視野が求められる社会テーマです。そんな広く、大きなテーマに魅力を感じてアクションしている学生たちの、防災を「伝えたい」、「活かしたい」の原動力や取り組みについて考えます。



今回は、「新聞で伝える活動をするチーム」と「感震ブレイカー設置の活動をするチーム」に登場していただきまして、「コミュニケーション」に焦点を当て、次の時代に「KOBEのことば」が伝わる形を探ります。

この時間は、できるだけ会場のみみなでディスカッションできる活発な意見交換の場づくりを目標にしたいと思います。

それでは、出演者の方をご紹介します。

向かって左から、コーディネーターを担当していただきます関西大学社会安全学部准教授、奥村与志弘さんと防災デザイン研究会GK京都デザイナー、ト部兼慎さんです。

続きまして、パネリストとして、神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミの長井裕貴さんと巽翔さん、教授の安富信さん、続いて国立明石工業高等専門学校D-PRO135°(明石高専防災団)地域連携チームの竹谷夏葵さん、助教の本塚智貴さん、そして舞台下、グラフィックファシリテーションを担当していただきますTAGAYASUの鈴木さよさん、国立明石工業高等専門学校5年生の多田裕亮さん、以上の皆様方になります。なお、鈴木様からグラフィックファシリテーションについてご説明をお願いします。



○TAGAYASU 鈴木さん 皆さん、こんにちは。こちらの場所で今からパネルディスカッションの内容を目でも見えるように残していきたいと思います。伝えるという言葉は耳からも目からも伝えられると思うので、そういった試みで今回導入させていただいています。怪しい者ではないので、よろしくお願いします。



○司会 人と防災未来センターリサーチフェロー 辻岡さん よろしくお願いたします。

その他、本日御参加いただいている学生さんや関係者の皆様にも意見交換にぜひ御参加ください。

ここからの進行は、コーディネーターの奥村さんとト部さんをお願いしております。それではよろしくお願いたします。

### ○奥村コーディネーター 今ご紹介

いただきました関西大学の奥村です。例年このパネルディスカッションというか発表の後にこういうディスカッションをするコーナーというのがあるんですけども、今年は別にNHKの朝の番組をまねしているわけではないんですけども二人でやってみようと、博多華丸大吉ではないんですけども、奥村、ト部ということでよろしくお願いたします。



皆さん、今年1月17日で阪神・淡路大震災から24年ということで、阪神淡路の年はイノシシだったんですね。干支が二回りしました。12年前はちょうど結婚した年でまだ学生だった、客席側の立場だったんですね。今日渚中学校の学生さんがいましたけれども、24年前、阪神・淡路大震災が起こった年は私は中学生でした。今日発表を聞いていて、すごい、24年って、彼らぐらいなのがこんなになるんだなあと感じました。色んな活動がこの24年間あって、色んな活動をしている人に今登壇していただいています、会場にもたくさんいらっしゃるの、いろいろ話を聞きながら今こんなになっているんだな、これからどうなっていくのかなというのが見えてきたらいいかな、考えていただけたらいいかなと思っています。ト部さん、どうですか？

### ○ト部コーディネーター ト部で

す。仕事はデザインをやっています。24年前は奥村さんは中学生、私は社会人でした。会社に入って3年目ですかね。デザインをやりはじめて3年経って、そのころはあまりよくわかって



ないです。神戸の大開という駅がありますね、新開地の隣に。あそこから5分位の所に実家がありまして、会社は京都ですが、当時そこから私は通っていたんです。今は大阪に住んでますが。なので、揺れの中におりました。家はよくある二階が一階になったやつですね。被害程度でいうと総破壊で全壊でした。会社に入ったのは、環境デザインというのがその当時世の中に生まれ出てきたときで、その領域の仕事をやり始めていました、防災と環境デザインはすごく密接でして、何かデザインで防災のお役に立つことができたらなということで、このメモリアルの会に入れていただいたので、私は今年で23年目です、ロゴやチラシなど広報物を作ったり、色々やらせていただいています。時間が経てばいろいろ変わるなと思って…この壇上に上がるのは初めてです。よろしくお願いします。

○**奥村コーディネーター** シナリオを作っていませんので、どうなるのか私らもわかりません。ですが、きっと今こんなになっているんだなというのを皆さん一人一人のここの中に作っていただけるのではないかなと思っておりまして、私たち司会者も、今から一時間後どんな思いをここに抱いているのか楽しみにしながら進行していこうと思っています。

学生さんの発表があったので学生さんは大体今朝発表された方だなということとわかっていただけだと思うのですが、少し学生と違う方が登壇されていますけれども、先生です。また後で振ります。先に各学校の活動をご報告いただいたのですが、その活動に協力してくださった方が今日はスペシャルゲストということで、会場に来ていただいているんですね。まずは、最後に報告のあった神戸学院の新聞ですね。「わせらん」新聞の取材協力者、災害支援団体「チーム神戸」代表の金田真須美さん、会場にお越しいただいております。お忙しいところ、どうもありがとうございます。先に自己紹介がてら少しお話をお聞きしたいのですが、金田さんは阪神・淡路大震災とのかかわりというのはどういうものだったのか、まずその点、教えていただけますでしょうか？

○**災害支援団体「チーム神戸」代表 金田さん**

24年前は被災者で、イノシシ年の35歳ですね。被災して何もすることがなくなってしまって、焼け野原になった街、そこをある日の朝さまよいながら消防署員に止められるのを無視して、50ccのバイクで白煙の中を突っ切ったことを先ほど思い出しました。大開通、あの時は大きな穴が開いていたとか、24年間の月日というのはすぐ戻るんですね、不思議なもので。そういう刻印というか



烙印というか、それが押されてしまったような神戸市民で、それ以降は災害支援に従事させてもらっています。今、東北、それと熊本、兵庫県立大学の院生の皆さんと広島や、岡山、それと安富ゼミの皆さんにもご協力いただいた7月豪雨の神戸の東灘で、あそこでボランティアセンターを立ち上げたりしています。ふだんはノーメイクでございます。よろしくお願いします。

○**ト部コーディネーター** ありがとうございます。あともう一つ、質問させていただきたいのですが、今回学生がインタビューという形で、新聞にまとめることは最初からご存じだったのでしょうか？

○**災害支援団体「チーム神戸」代表 金田さん** いや、何のこっちゃさっぱりわからなかった。ただ若い人が好きですからね。何かぎょうさん来てくれるって言うんで、やったーというぐらいで。私は多弁です、ようしゃべります。関西のおばちゃんですから、あめちゃんもやらずに一人でしゃべって、先ほど初めてこの「わせらん」新聞を拝見しまして、まとめるの大変やったろうなと思って、本当御苦労さまです。

○**ト部コーディネーター** ものすごくしゃべりはったんですね。何時間ぐらいしゃべられた？

○**災害支援団体「チーム神戸」代表 金田さん** いや、もう覚えてない。

○**奥村コーディネーター** 覚えてないぐらい？

○**災害支援団体「チーム神戸」代表 金田さん** ただ日は暮れませんでしたよ。食べ物一つ与えずしゃべり続けた記憶があります。何をしゃべったかも覚えていないぐらいで、先ほど「わせらん」新聞を拝読して、こんなふうにな上手にまとめてくれたんやなと、こんなこと言ったのかな、私っていう状況です。若い人たちがこうやってかかわることを私らは応援するしかできないですね。先ほど学生さんの発表で避難所についてあったんですけども、私から見たら避難所というよりは収容所なんですね。多くの方が誤解なさっている。24年前は私もそうでした。避難所は災害が起きた直後に足を踏み入れた方しか避難できないと、全国的に勘違いしています。在宅の方々をずっとサポートして聞いて聞けるのは、最初に行っていないからもう入るところがなかったのよと、皆さん、誤解なさっている。それぐらい避難所のことが周知されていないのです。だから避難所のことだけ伝えるとしても、すごく大きな意義はあると思うのです。今日ざっと周りを拝見すると若い女の方が多い。避難所運営は女の人の声が届いていません。女性の視点でということで、男性が配慮してくれるだけなんです。更衣室にしても洗濯物を干すにしても、授乳室とか当たり前のことです。女の人だって

ゆっくり足を広げてのんびりしたいこともあるんです。洗濯物も人前に干すのは嫌よね。そういうのは女性が動かないといけません。なので、どんどん発言したり行動できるようなそういう女性になってほしいなと思っています。机上の空論以外で現場の事を知りたいという方はどんどん私のところにお越しください。

○ト部コーディネーター どうもありがとうございます。

○奥村コーディネーター ちなみにどの学生さんが取材にあたって話を聞いたんですか？当時の様子を教えてください。

○長井さん 当時の様子ですか？

○奥村コーディネーター そうそう、どれぐらいの時間、話をしたか思い出せないと御本人はおっしゃっているんですけども、聞いている側は時間を見ながら聞いていたわけじゃないよね。まだ終わらへんのかなみたいな。

○長井さん ほかの方は大体一時間ぐらいのインタビューをさせていただいて、一時間ぐらい話してくれませんかという話をしていたんですけども、2時間は余裕で超えていました。

○奥村コーディネーター あめもなしで。

○長井さん コーヒーは入れていただきました。

○安富先生 事務所の掃除はしたの？

○長井さん 事務所の掃除はしました。

○奥村コーディネーター 二人で行ったんですか？

○巽さん そうです。

○奥村コーディネーター そんな感じでしたか？あつという間の二時間？

○巽さん いや、長かったです。

○奥村コーディネーター 話を聞いていて今おっしゃっていたような女性への配慮がないとか、避難所は直後に足を踏み入れないと後から行ったら入れないんじゃないかと誤解している人が多くて、阪神・淡路大震災のときのいろんな問題が全然改善されていないという問題意識をおっしゃっていましたが、インタビューのときにはそんな話はなかったんですかね。

○長井さん そうですね。そういう話はあんまりなかったです。

○奥村コーディネーター 今初めて新しい、新ネタですね。もう一個記事を書かなあかんという。

○長井さん ちょっと足りなかったですね。

○奥村コーディネーター 続報をね。ありがとうございます。



○ト部コーディネーター ちょっとこんな感じで実は筋書きがないということなんですけれども、私たちが一番やりたかったことはここにいる人が順番にしゃべってここで議論しているやつをみんなが聞くという、いわゆるパネルディスカッションのスタイルはやめたいなと思っています。そういう意味では今回かかわっていただいた人から当然入っていているのですが、当然皆さんかかわっていらっしゃるわけで、ここに名前が挙がっている以外の人も会話できるような時間にして今日は過ごしていきたいなと思っていますので、よろしく願います。次は早速ですけど、もう一人のゲストをご紹介したいと思います。

○奥村コーディネーター 東二見地蔵町自治会長の増本さん、お越しいただいておりますので、ちょっと紹介させていただきます。

○東二見地蔵町自治会長 増本さん 明石市東二見地蔵町自治会長をしております増本です。

○奥村コーディネーター 一番前に座ってちょっとくると皆さんにお顔を見せて、すみません。増本さんです。今日はお忙しい中、お越しいただいてどうもありがとうございます。増本さんにもさっき金田さんにお話を聞きしたのと同じようにちょっとお聞きしたのですが、阪神・淡路大震災とのかかわりというか、そのあたり教えていただけますでしょうか？

○東二見地蔵町自治会長 増本さん 私は今67歳ですけども、震災のときは働き盛りで、震災の前日にアメリカデトロイトに出張していました。二週間後ぐらいに帰って来たんですけども、明石市のマンションが半壊になっており、修復に1年くらいかかったんですけども、地震を経験していないもので子供たちの父兄からは村八分状態です。共有してないやんかということで、一生懸命いろんな活動をしたつもりなんですけれども、やっぱり分かり合えないところがありました。アメリカでは家族はどうですかとか取材を受けました。

○奥村コーディネーター 家族と連絡はとれていたのですか？

○東二見地蔵町自治会長 増本さん はい。日本の皆さんよりもアメリカからのほうが早く電話がつながったようです。

○奥村コーディネーター 国際電話は<sup>ふくそう</sup>輻輳してなかったということですか？

○東二見地蔵町自治会長 増本さん 夜通し何回も電話したんですけども、後で日本の皆さんと話したら、それやったらアメリカのほうが早いやんかということを書いていました。



- 奥村コーディネーター** それは私初めて知りました。
- 東二見地蔵町自治会長 増本さん** 最初はアメリカで聞いた第一報は、淡路で100人ぐらい死んでいる地震が起きたという情報だったんですけども、CNNで高速道路が倒れているのを見たら、そんなうそやろというのをすごく感じましたね。
- 奥村コーディネーター** その当時、お子さんは小学生ですか？
- 東二見地蔵町自治会長 増本さん** 子供は明石の中崎小学校というところで、多分小学校5年生ぐらいだったと思いますけれども、その小学校の運動場が半年間自衛隊のヘリポート基地になっていました。
- 奥村コーディネーター** 増本さんは、明石高専のグループと一緒に活動をしているのですよね？
- 東二見地蔵町自治会長 増本さん** そうです。今、前に座っている竹谷さんが今D-PRO135°の実践のチームリーダーをしており、この2年はどっぷりコミュニケーションを取っております。ちょうど今日は皆さんの話を聞いていて、若い皆さんがいろんな活動していただいているのはすごくいいなと思いました。もう一つ思ったのは、他の皆さんの発表を聞いたらいろんな疑問点や突っ込みどころがいっぱいあるんですけども、竹谷さんの発表を聞いたら深くはまっているせいで何も疑問も出てこなかったです。そういうもんなんです、こういう場で多分皆さんのグループも活動していたらそこにはまっているもんですから、俯瞰的に第三者の目がないと思うんですね。こういうところでいろいろ発表してもらって、いっぱい突っ込んでもらって、なぜなぜという疑問はいっぱい沸いてくると思うので、こういうところでよく聞いてもらって突っ込んでもらうのが非常に大事なことだなと今日実感できました。
- ト部コーディネーター** なるほど、なるほど、ありがとうございます。
- 東二見地蔵町自治会長 増本さん** ちょっと話が長くなるんですけども、竹谷さんとの活動でちょっと調子悪いことがあったので、ご紹介させていただいてもいいでしょうか？
- 奥村コーディネーター** さっきの発表の中にはなかったような新事実？
- 東二見地蔵町自治会長 増本さん** ちょっとあったんですけど、ええ事ことしか言ってなかったの。
- 奥村コーディネーター** ええ事しか言ってなかった、何かあったんですか？
- 東二見地蔵町自治会長 増本さん** 実は今日来ていただいた皆さんにも考えてほしいなと思ったことがあります。

竹谷さんが、感震ブレーカーをつけたんですという話をされてましたよね。それはD-PRO135°の活動として持ちかけられて、なかなかええ話だなとお金も助成金を段取りしてタダでしますと言ったら、それはタダほどいいことないなと思ったんですけど、学生さんと僕ら自治会のメンバーで協力して取り付けたんですけども、竹谷さんが言ってくれたように、避難行動要支援者というひとり暮らしの高齢者のお宅をターゲットにして絞り込んで活動したんですね。ある日、私に電話がかかってきて、会長、晩に真っ暗のときでえらいことなってしまうからと言って、周り停電だろうと思って周りを見たら周りの家は明るくて私のところだけ真っ暗だったという。

- 奥村コーディネーター** 停電している？
- 東二見地蔵町自治会長 増本さん** はい。その原因は、私たちと竹谷さんの高専生らと一緒に取りつけ作業をしたんですけども、そのやつが割かし簡易な構造で粘着テープでブレーカーのスイッチのところにつけまして、おもりが揺れで外れたら落ちると、そのおもりが落ちるのでぴつと粘着テープで張っていたら、粘着が外れて落ちて一瞬で真っ暗になったんですね。そのことをみんなを持ちかえってレビューしましたところ、これは調子が悪いんじゃないかと、もともと感震ブレーカーの機能の目的は災害で電気がいったん落ちて、それが復帰したときにみんな避難していて家が燃えてしまったというのを防ぐためのものなんですけれども、まず被災者の命を守ることが大事ですよね。そのときに地震が起きてブレーカーがぽんと落ちてもうて、関西電力から供給はされているのに家が真っ暗闇になってしまうと、家の中が片づいてないのでどうやって玄関に出たらいいのかわからへんと、靴もどこかわからへんということで、閉じ込められる可能性があると思うんですね。そういう視点からして、これはあかんということになりまして、竹谷さんと大塚先生の了解を得たんですけども、一応今ついているんですけども、その重りを取り外して、機能しないようにしているんです。人と防災未来センターの中にも感震ブレーカーのサンプルが置いてありますけれども、そういうコンセプトはどうなのかなというのが、私共としてははっきりしていないので機能しないようにしています。
- ト部コーディネーター** なるほど、勉強になりますね。
- 東二見地蔵町自治会長 増本さん** ほかに実は明石高専さんとは、もう10年近くお付き合いいただいでいて、私が会長をしていますけれども、その前から避難ルートの地図を作ったり、私が会長、副会長のときからは、タンスの固定とか避難ルートの玄関あたりの下駄箱を固定したり、そういうルートの片づけをすると、そ

うのをやってきているので、それは確実にできて真っ暗でも私は自分で出られるわということになれば、そういうブレーカーもあると思うんですけども、今現在そんなことで、そのブレーカーをつけようかなと皆さんが思われたときに、そういう視点もあるので覚えてほしいなと思います。

○**ト部コーディネーター** いえいえ、一つの課題ですね。私は仕事で防災啓発用冊子のデザインとかしていますが、感震ブレーカーをつけましょうと結構載せていますからね。これはまたちょっと一つ考えどころをいただいたなと、これも課題をいただいたということになりますね。

○**奥村コーディネーター** 竹谷さんは、その話はもう聞いていたのかな？もともと竹谷さんが感震ブレーカーをつけなあかんと思ったのかな？それとも先生にこれえんちゃうと言われて考えたのかな？

○**竹谷さん** 明石高専では防災リテラシーという授業を1年生のときに受講するのですが、その授業の中で通電火災という話についてはすごい印象に残っていて感震ブレーカーについても知っていたので、先生から提案を受けて、私もそれはいいと思いますという話になり、通電火災の話が印象に残っていたので、取りつけたんですけども、私自身はふだんから枕元に懐中電灯を置いているという習慣があったので、全く真っ暗になってしまったときにどう対応すればいいかという話の視点が出てこなかったんです。今回こういう話を受けてまず懐中電灯を枕元に置くとか、自分がまず真っ暗な中で地震が起こったときに動けるための対処が必要ということがある程度わかったかな。

○**奥村コーディネーター** なるほど、竹谷さんの中ではまだ感震ブレーカーは生きているね。まだ生かされると、懐中電灯とか使って停電がぱっとしてしまっても逃げられるように電気は別で用意したらいいのではないかなと思っているんだね。

○**竹谷さん** そうですね。私はそう思っています。

○**奥村コーディネーター** なるほど、まだこれから先どうなるか、これも第二弾、次ありそうな感じですね。感震ブレーカーは、具合悪い面があるなという話を聞いただけで、その後まだ議論したりとかはやっていないのかな、これからなのかな？

○**竹谷さん** まだ深い話はしていません。

○**東二見地蔵町自治会長 増本さん** 竹谷さんに、こんなことになってしまったらあかんやんかと言ったんですけど。

○**奥村コーディネーター** 言うたんですね。

○**東二見地蔵町自治会長 増本さん**

早速竹谷さんが動いてくれて、メーカーの社長を呼びつけてきてくれました。社長が、「そんな



いいかげんな粘着テープで設計していないから、現場を見るわ。」ということで、社長と僕と竹谷さんとで現場に行き確認したところ、ブレーカーの蓋の面が正常にクリーニングしていない、そういう可能性もあるなという話をいただいたんです。それ以外にも今日竹谷さんから、これからこんなことをするねんてといっぱい宿題を出してくれたんで二人で片付けるようにしたいと思っています。

○**ト部コーディネーター** いいお話というか、いい視点の一つ出たかなと思いますね。感震ブレーカーをつけたりいいよというのは何となく前提で、それが本当に起こったときにどうなるのということをあんまりイメージできずに、とにかく良さそうやしつけてみようかみたいなのが結構流れとしてはあるよねと。

○**奥村コーディネーター** 学校で習ったのは、感震ブレーカーがあると通電火災が起こらへんからいいのかなというところは学んだけれども、それをつけたら逆に困ることもあるというのは活動する中で初めて知ったんだよね。

○**竹谷さん** そうですね。

○**ト部コーディネーター** なるほど。はい、ありがとうございます。ちょうどいい話題をいただけたんですけども、このパネルディスカッションのタイトル、鈴木さんが描いていただいているのもそうだし、このチラシのパネルディスカッションのところもそうですが、「私が伝えたい」と言い切っていないでしょ。よく見てもらったら、このデザインはこだわったつもりなんですけども、伝えたい？って感じで小さくなっていてるんですね。この意味は、今の感震ブレーカーのこともそうなんですけども、言い切れないこともあるし、わかったこともあるし、これももしかしたら最新の話じゃないかなということで、私が伝えたいことというパネルディスカッションよりもこれを伝えるべきか、伝えたほうがいいのか、みんな多分そういう中で模索しながら活動されているというニュアンスをここに入れて私が伝えたいことなんです。そういう意味で多分言い切れることばかりじゃないと思うんです。疑問点も残っているだろうし、去年の高森さんの課題でいう「もやもや」という言葉かもしれないですけども、何かその感じ、そこを議論できたらおもしろいなと思っています。そういう観点で、今度は全体を見ていただいていた先生に話を聞きます。

○**奥村コーディネーター** 若い人から行きましようかね。

先に安富先生だとしゃべりづらくなるかもしれないから。本塚先生は明石高専で、テーマを与えたのは先生？

○本塚先生 ではないです。

○ト部コーディネーター 誰ですか？

○本塚先生 私も明石高専出身で、去年までは人と防災未来センターで研究していたのでこの会場運営をしていて、この春から母校に戻って教職についたので、会場運営していた関係で明石高専は母校ですので活動というのは陰ながら応援もしていましたし、活動の支援もさせてもらっていたんですけども、テーマを与える段階では私は明石高専の助教ではなかったもので、そのときはこの会場にいる大塚先生や、防災リテラシーを立ち上げた先生達で、そういうのを引き継いだという形です。ただ今日、増本さんにお話しいただいたように、社長さんと一緒にお宅に訪問するのは一緒に行かせていただいて、増本さんがおっしゃったように私もある意味そのときは第三者的な視点で入れたので、思い入れがそこまで強くないというか、ちょっと客観的に見られるので社長は我が社の製品に自信を持っておられるし思いがあってされている。学生も思いがあってやっている。よくあるのが災害とか防災のところって全員別に悪気があるわけじゃないんですけど、それがきちんと伝わっていない部分と当事者にも意識とは乖離している部分があるのかなと、災害時もそうですけれども、やはり不具合は起こるんですよね。それが特に今回の場合は要配慮者の方の家に、ふだんからひとり暮らしで自分でブレーカーの上げ下げなんかは普通するとも思っていなし、我々もそこは完全に想定はしていない中で起こった悲劇という部分があって、それが皆さんの意見を集約するとつけないほうがもしかすると幸せなのかもしれないというところに、地域課題的にはそうなるのかなと、ですのでこのエピソードについて私も思ったことは、阪神・淡路大震災や、日本の防災で得られたエピソードがすごく集約されて、これだけしたらいいという、すごく簡単なところは伝わるんですけども、その裏側にあるものや、それをつけたがゆえに発生する課題というところが伝わっていないので、それが発見できたというはすごくよかったのかなと思っています。我々としてもこういった活動をするので我々としては頑張っていると思うし、地域方に評価されているんですけども、した後のフォローというのも考えて、やったからこそ起こりえる問題であったりとか、先輩たちがやったことを、つけたものをほったらかしにはできないので、出した成果をほった



かしにできないときに誰が責任を持っていくのかということも次に、自分たちの組織として、先ほど舞子高校であったようにチームとしてかかわっていくということも重要じゃないかなと思います。

○奥村コーディネーター 本塚さんは私より若く見えるんですけども、阪神・淡路大震災とのかかわりはどうなのですか？

○本塚先生 阪神・淡路大震災のときは私は小学校6年生です。奈良県の自宅で被災したので震度3ぐらいですね。ただ奈良県の私の同級生ですら、そのとき今でいうトラウマじゃないですけど、余震や揺れを非常に怖く感じたという話があったので、その後高校から明石に出てきましたけれども同級生は当時を経験しているので、その温度差というか奈良の震度3でも怖く感じていた、それを実際に現地で感じた同級生と過ごしたということは、少し印象には残っていますけど。

○奥村コーディネーター さんから引き継がれたとお聞きしたんですけども、太田先生後ろでほほ笑ましく見てらっしゃいますけどね。太田先生は神戸市の職員をされていたので、まさにど真ん中で活動された方だと思うんですけども、太田先生は先生をしながら学生さんたちにいろんな活動を促すような指導をされていたと思うんですけども、これごめんなさい、本塚さんに聞く質問なんですけどね。本塚先生はそういう先生方の活動をどんな感じで引き継いでやってらっしゃるのですかね。自分がこういう教育を受けてきたなどは違いますが。



○本塚先生 そうですね。私自身もやはりある意味今回の災害メモリアルアクションKOBEとしては第二世代、直接経験したときは子供であって余りよくわからないまま社会の混乱というか大変なことが起こっているんだなと思っていて、その後の復興、復旧の中で日本が災害先進国だとか、防災先進国だということを自分の中でも何となくそうなんだろうなと思って、私自身の博士論文は、インドネシアの避難所で書いたんですけども、当時インドネシアに来たとき自分は日本の最先端の防災を発展途上国の防災に役立てるという思いで行ったんですけども、打ちのめされたのが向こうのほうが進んでいるんですよね。ハード的には確かに日本の対策はすごく進んでいるんですけども、向こうはソフト的にイスラム教の助け合いの文化であったり、いろんな背景というのがあると思うんですけども、日本ではやっていないというのを一歩進んだソフト面の対策をされていて、むしろ教

わかることはいっぱいあるし、何かそんなにあぐらをかかずにもっといろんなことを真摯に聞かないといけないなという立場で、もちろん太田先生たちの第一世代の方の教訓も聞きたいですし、でもそれだけが全てではなくてもっとほかにもいろんな方法論があるし、正解がない中でいろんな情報を持っておかないといけないということを身にしみて実感したのでそれを次の世代に、もちろん教訓では言われているけれども、もっといろんなことができるし、それだけが教訓じゃないよということを伝えていくような感じですね。

○ト部コーディネーター なるほど、なるほど。

○奥村コーディネーター 私と近い世代ですからね。私は直接震災で家を失ったりとか家族を失ったりとかはないけれども、結構真面目に働いて今は防災をやっているんですよね。モチベーションは全然違うと思うんですよ。太田先生とかこの後に話を伺う安富先生とか、ト部さんもまだ若かったとはいえ神戸に住んでらっしゃったからね。多分、その辺のモチベーションは少し違っているんだろうなと思うんですけどね。



○ト部コーディネーター 本塚さん、インドネシアでは最新が歯が立たなかったということですけど、今回のテーマの未災者が未災者に伝えるということは、阪神・淡路大震災をベースにして24年たって多分デジタルアーカイブの方もこのモデルは自分たちの今後の活動にも使えるみたいなことをおっしゃっているぐらい、もしかしたら防災の最先端の研究かもしれないと私なんかはちょっと思ったりもしてて、伝えていく活動のまだわからない部分はたくさんあるけど、できればもっともっと掘りたいなという思いが実はありますので、この活動を通じて最新のことをなし遂げていただきたいなと思ったりしましたね。

○奥村コーディネーター 直接経験していないからもう熱が低いように見えるかもしれないけれども、少し神戸の震災のことを、さっき客観的みたいな言葉をおっしゃっていたと思うんです、本塚先生も。少し距離を持って見ているのかな、我々世代というのは。それが直後10年、15年という中で行われた活動とは違った活動になっているような気がしますけどね。

○ト部コーディネーター ちょっと引いた視点で。自分がやってこられたことを今回のテーマをもつ学生さんがメディアという形で作るというのを聞いて指導されていると思うのですが、やっぱりそのように見てらっしゃるじゃないですか。その辺の観点が大切ですね、今回。

○奥村コーディネーター すごいですよね、この「わせらん」新聞。これ現役ばりにやったんですか？学生だけ、こんな文章はみたいな。どんな感じでこれができ上がったのか？

○ト部コーディネーター まずは、自己紹介をしていただいて。

○奥村コーディネーター 知らない方もたくさんいらっしゃるのよ。

○安富先生 当時小学校5年生でした、娘が。当時38歳、読売新聞でデスクをやっていました。今の質問を先に答えると、久しぶりにデスクの血が騒いだ。



○奥村コーディネーター 鬼編集長になっていたわけですね。

○安富先生 それぐらい久しぶりにデスクの気持ちを味わうぐらいでしたし、この場をおかりしてちょっと謝らないかんのが、今日ここに10人ぐらいインタビューを受けた方がおられ、何人かの人にすみませんと行くと、小林郁雄さんは写真いっぱい撮られたのにその写真がなくなったと言われて後からもう一回送り直したとか、諏訪先生は帰られましたけれども、諏訪先生は女の子が突然来て、先生、アボちょうだいと言われて、俺は援助交際せえへんねんけどって思った。よう聞いたらこういうことだったとかね、いろいろ皆さんに大変御迷惑をかけて、私は正直言って、インタビューをして来いと何も言わずにインタビューだけして来いと、余り指導しなかったのもうちょっと指導しとけばよかったなと思ったんです。編集のことをいうと、ある学生はこの新聞大体一つ一人の方に500字ぐらいなんです。原稿用紙1枚ちょっとぐらいだからね。これを5,000字書いてきた学生がいて、諏訪先生原稿ですけど、と言うと誰かわかっちゃうんだけど、それを削るのに30分かかりましたね。最終的にデスクをやって怒りながら、周りみんな引いていましたけれどもずっと怒りながらやっていました。24年前のデスク環境をちょっと思い出したなというような。

○奥村コーディネーター 結構これは時間的にもタイトな形だったんですかね。新聞なんて毎日毎日ですからね。

○安富先生 12月ほとんど怒っていたかな。もう一つ言えば、今彼らは安富ゼミの3期生なんですけど、今日1期生が県立大学の大学院で発表していたのが、1期生でいるんですけど、彼の同僚の学生が昔、教訓は私にはよくわからんわ、伝わっているのかなというところから始めて3年目に今来ているんですね。自慢すると、この3年生は割と優秀なので、去年無理やり新聞を作ってみよ

うかというのを初めて言ったんですけども、よう作ってくれましたね。

○**奥村コーディネーター** すごい立派ですよ。レポートのレベルは、もうはるかに超えてきちんと新聞だという印象をこれを読んだときに感じたので。

○**ト部コーディネーター** 5,000字を30分で削るのは大変…

○**奥村コーディネーター** それもすごいですよね。

○**ト部コーディネーター** 金田さんのお話をこれだけにまとめるのも相当大変だと思うんですけど、話されていることはほぼ全て教訓じゃないですか。それをいかに絞り込むというのは、やってみてどんな感じ？

まず、どう絞り込んだのですか？

○**奥村コーディネーター** 自分でやったのかという話ですよ。

○**ト部コーディネーター** 安富先生の編集長の指導に基づいて？

○**巽さん** 編集は安富先生がやってくれたんですけども、一応まとめるのは僕らでやって、そこから削るのは。

○**ト部コーディネーター** なるほど。ポイントみたいな、これは3名の方がこういう何か、災害の輪郭を捉えるみたいな一言にしているじゃないですか。その辺りというのは、やってみたポイントって何ですか？

○**長井さん** その新聞が9枚あると思うんですけど、一番上の方の印象に残る言葉を一番上の黒いところに入れてさせていただいたんですけども、見出しに。そこは先生に決めてもらったんですけども、大事な言葉というのは僕たちがインタビューをしながらメモとかしながらして、みんなに伝えていく、伝えたい言葉ということで一番上の見出しにさせていただきました。



○**奥村コーディネーター** 簡単なことじゃないですよ。短く伝えるってすごく難しいことですよ。先生に新聞の記事を書いてみようかと言われて、取材して来いと言われて、それを聞いたときにどんな感じ、どんな印象を受けたわけですかね。もともとほんまもの新聞記者ですからね、デスクをやられてた。すごくリアルな感じでこれができ上がるまで大学で体験しているわけですよ。これを最初言われたときどんな印象を受けた？

○**長井さん** 最初はよくわからなかった。

○**奥村コーディネーター** よくわからない、何を言ってるんだらうと？

○**長井さん** なぜに作るのかもわからなかったのが難しかったです。

○**奥村コーディネーター** だけどこここまで頑張っていてですけど、もうやめようかなと思わへんかった？

○**長井さん** やめようかなとは思わなかったですけども、この1月12日までに完成させなければならなかったんで、それに近づくにつれて先生がどンドンイライラしてきました。僕らは追い込まれていくので大変でしたね。

○**奥村コーディネーター** これやっていく中で先生がイライラしているというのはあるかもしれないけれども、自分なりにせっかくこういうものを作るからここは工夫してやっていきたいとか自分なりに、先生、ここは絶対にこの文章を書きたいとか、そういうのは出てきたんですかね？もう言われるがまま？

○**長井さん** そうですね。作っていくうちに自分たちは今すごいことをしているんだなというふうになってきて、肩書だけ見ても。昨日完成して昨日の夜全部読みました。

○**奥村コーディネーター** これは昨日できたばかりなの？

○**長井さん** そうです。

○**奥村コーディネーター** すごいね、リアルな新聞やね。

○**長井さん** 昨日の夜全部読ませていただいたんですけども、肩書だけ見てもラジオ関西社長だったりとか、すごいなと思って。最初は全然思っていなかったんですけども。

○**奥村コーディネーター** そうですか。じゃあなかなかこの活動を通じて、長井君はふだんなかなか会えへん人に取材できたり、もともとほんまもの記者やからね、ここにいる人。ほんまの新聞のようにこうやってつくったという経験もすごいことやなって今は思うんやね。

○**長井さん** 思います。

○**奥村コーディネーター** なるほど。そのことは親にも話した？

○**長井さん** いや、まだ話していないです。

○**奥村コーディネーター** 誰にも話してない？

○**長井さん** そうです。誰にも話してないです。

○**奥村コーディネーター** ないしょなん？

○**長井さん** ないしょとかじゃないですけど。

○**奥村コーディネーター** 秘めるタイプやね。どうですか？どんな感じで彼と同じように、この最初言われたときは？

○**巽さん** 最初は、したくないなと思っていました。

○**奥村コーディネーター** したくない、正直やね。

○**巽さん** はい。やっていくのも難しくて、できたときは達成感がありました。

○**奥村コーディネーター** 達成感。またやりたいなと思いますか？

○**巽さん** やりたくはないです。

○**奥村コーディネーター** それだけよく頑張ったってことやね。

○**ト部コーディネーター** 編集作業というのを僕も仕事でちょくちょくやらせて頂くのですが、いろんなことを聞いたり物を読んだりして、仕事に入るときに自分の中にくわーと入ってくるよね。これは大事やなとか、何かこれは人に知ってほしいなという部分を残していくような仕事ですけど、そういう場合は今回ここにたくさん掲載されている、そうそうたるメンバーの方々のお話なんですけど、ここから自分が知り合いとか家族とか大事な人に伝えたい、あるいは、やりたいなということは結構ありました？

○**巽さん** そうですね、ふだん新聞とか読まないんですけども、今は作って読んでみて震災に関して伝えないといけないことはたくさんあったと思います。

○**奥村コーディネーター** 中でも今日話を聞いていると、僕も聞き方も悪いのかもしれないし、発表のときのやつも聞いてても、ト部さん、結構阪神・淡路大震災に対する思いは学生さんたちは語っていない、発表を聞いてても。今の話もこれを作るの大変やったと言うけど、阪神・淡路大震災の教訓をいっぱい聞きに行っているけれど阪神・淡路大震災のことはあんまり言わないのは何でなんだと思うんですけど、阪神・淡路大震災をいっぱい聞いて、24年前の経験とかその後の経験とか聞いてこんなことを思ったとかいうよりは、この新聞をやったというそっちのほうが先に来るのかな？

○**巽さん** そういうことではないんですけど。

○**奥村コーディネーター** そういうことではない。結構やっぱり阪神・淡路大震災に対しての思いも変わった？

○**巽さん** そうですね。

○**奥村コーディネーター** 何かもうちょっと言って。だって竹谷さんは高校生にして、通電火災はあってはならない、だめだと言われても感震ブレーカーは大事だと？

○**ト部コーディネーター** 社長を呼びに行ってますから。(笑)

○**奥村コーディネーター** そうですよ。負けてられへんよ。阪神・淡路大震災に対する思い？

○**巽さん** 活動をするまでは、震災とかに余り興味がないというか知らなかったというのが正直なところですよ。こういう場というのが少ないと金田さんの話を聞いて、こういう場というのがこれからも大切になってくるのかなと思いました。

○**ト部コーディネーター** ありがとうございます。今回、テーマが未災者から未災者へということで、感震ブレーカーはそういう活動だけじゃなくて、いろいろ寺小屋みたいなものもされていたりとか、明石はされているので

すけれども、例えば増本さんといろいろされている活動から得たことをやっぱりそれは自分の知り合いとかに伝えていったりとか、子供たちに教えてあげたりとか、そういうふうになるようになってきたりしていますか？今は感震ブレーカーを取りつけるという作業というか活動がおもしろいんだと思うんですけども、たくさん話していると思ってましてね、地元の方、経験者と。

○**竹谷さん** どちらかという后感震ブレーカーは一つの手段と認識していて、どちらかという地元の小学生から高齢者の方と防災についてコミュニケーションをとっていくほうに楽しみというか喜びを感じていて、高校3年間一生懸命に続けられているのでそこは私のモチベーションにはなっているかなと思います。

○**ト部コーディネーター** すばらしいですね。

○**奥村コーディネーター** それが続けようという気持ちをずっと維持するのに大事になっているんだね。

○**竹谷さん** そうですね。

○**奥村コーディネーター** なるほど。人によってはそういうのが嫌だという人もいるんでしょうけれども、竹谷さんはすごくそういうのが楽しんでますか。

○**竹谷さん** そうですね。今日も後ろのほうに、地蔵町でかかわってくれた小学生の子とか会長とかいっぱい来てくださっていて、そういう人たちとつながりができていくというところに。

○**ト部コーディネーター** せっかくなんで、後ろの会長ともう一人いっちゃう。彼女の活動についてちょっと一言お願いします。

○**奥村コーディネーター** 竹谷さん、紹介してくれますか？

○**竹谷さん** 前地蔵町自治会会長・五町委員会代表の神代さんです。

○**奥村コーディネーター** 神代さん、ちょっと立っていただけますか？今日はどうもありがとうございます。

○**前地蔵町自治会会長・五町委員会代表 神代さん**



今紹介されましたように地蔵町の前会長をしていたんですけども、現在は海岸線を含めた五つの町の団体、五町委員会というんですけど、その代表をさせていただいているんです。そこで大塚先生とは以前から二見にお住まいなので、厚意させていただいていろいろな情報をいただいて、特に海岸線は海拔2メートルぐらいの漁師町で危険性がたくさんありますので、竹谷さんのD-PRO135°の団体と4年前から地域で取り組もうということで出発しました。特に漁師町は通路が狭く非常に

密集している危険なところですので、そういうところを地域のひととD-PRO135°の方と一緒に回って、危険な場所とかを点検していただいて、現在は今、増本さんが言われたように地蔵町の自治会と取り組んでいるような状態です。その中で竹谷さんから寺小屋の相談がありましたので、ぜひとも地域の小学生にも参加していただきたいということで、ここに来られている阿部さんをお願いしてグループと一緒に参加していただけるような形で進めました。

○**ト部コーディネーター** ありがとうございます。阿部さんは楽しいですか？楽しくやられていますか？

○**地蔵町「防災寺小屋」参加者 阿部さん** はい。

○**奥村コーディネーター** 小学生なんですよ？

○**前地蔵町自治会会長・五町委員会代表 神代さん** はい、そうです。

○**奥村コーディネーター** 大きいですね。5年生、6年生？

○**前地蔵町自治会会長・五町委員会代表 神代さん** 小学6年生で背が高いと思います。

○**ト部コーディネーター** もう既に三つの世代、先生方を入れたら四つですか。四つの世代のモデルになっているんですね。

○**奥村コーディネーター** まさに未災者から未災者ですもんね。

○**ト部コーディネーター** まさにそうですね。これはすばらしいですね。

○**奥村コーディネーター** 寺小屋をやるのも災害の教訓をどう伝えるかみたいなモチベーションというよりはむしろ、さっき言ってくれたように何か新しくこんな子たちと出会えるとか、そういうのが楽しいからやっているんだよね。

○**竹谷さん** そうですね。私も気持ちとしてはこの災害メモリアルアクションKOBÉの趣旨とはちょっと違う形で。

○**奥村コーディネーター** いいよ、全然気にしないで。

○**ト部コーディネーター** そもそもそんな決まった趣旨はないというと怒られるのかな？

○**奥村コーディネーター** 大丈夫。

○**竹谷さん** 今までは高齢者の方とコミュニケーションをとることが多かったのですが、小学生ともコミュニケーションをとることによってつながりが持てて、それが地域の防災力につながっていったらいいなと思って。

○**ト部コーディネーター** すばらしい。

○**奥村コーディネーター** 小学生はどんな感じで来てい

るのか。地域を安全にするために寺小屋に参加しているのですか？阿部さん、しゃべれるかな？楽しい、楽しいから行ってる感じ？

○**ト部コーディネーター** どんなことを考えた、何が一番おもしろいですか？

○**前地蔵町自治会会長・五町委員会代表 神代さん** 実はお母さんからいろいろ僕もお話を聞いて、初めての経験ですから、ぜひ参加させてくださいということで、特に今まで関心があったわけではないと思うんですけど。先日もお母さんとお会いして今日の出席についても了解を得なあかんと思って話をしましたら、お家では当日の話とかを話しており、小学生でも大切な話やなということをお母さんから直接聞きました。

○**ト部コーディネーター** なるほど、すばらしい。ありがとうございます。

○**奥村コーディネーター** ありがとうございます。竹谷さんは小学生はどんな感じで来てくれている印象を持っているのですか？

○**竹谷さん** そうですね。どちらかという、防災について学ぼうというよりは今回特に体験会がRESQというボードゲームだったので、ゲームで遊ぼうという感じで来てくれている印象がありました。実際よく楽しんでくれました。

○**奥村コーディネーター** なるほど、D-PROのゲームね、RESQともう一個、チャレンジ！、あれはすごい完成度ですよ。高校生がつくったゲームとは思えない、どこかに売ってそうなぐらいの精度になっていると思うんですけど、今日作ってくれた学生さんもいると思うんですけども、どこにいるのかな。あれは作るの楽しい？

○**明石高専D-PRO135°（明石高専防災団）開発チーム 東條さん**

ゲームを私たちが作っていること自体が楽しいんですけども、それで防災が伝わればいいんじゃないかということで、防災とつなげて防災ゲームというのを作っています。

○**奥村コーディネーター** 何かすごいこだわりを感じますよね。デザインをやられているト部さんから見てあのデザインはどうですかね？すごくないですか？

○**ト部コーディネーター** いいと思いますよ。さっきも子供たちが、防災じゃなくてもそれをやりたいから来ると、そこは結構強力やなと、いわゆるツールという意味ではそこでそれがちゃんと機能して次の若い人たちがちょっと防災のことがわかるというだけでもこれは大したものです。僕はそう思って見えていますけどね。



○奥村コーディネーター すごいですよね。

○ト部コーディネーター ゲームの話題から新聞に戻すと、そういう伝達するもの、ツールとしてのゲーム、新聞なんて人に物を伝えるという、まさにそのものなんでメディアという世界をちゃんと見ようとしたときに、こういうのはど直球というか、今回教訓を聞いてきてまとめて新聞にするのは意外と見たことがなかったなというか直球は直球なんですけどね。そういう意味でどの部分を言ってやったらいいのかみたいなことというのが結構ポイント、ゲームは防災がそんなに主なきっかけじゃなくてもちょっと触ればいいのかというレベルだとしたら、新聞という形にすることは何か教訓は伝わらないみたいなことを言われているけれども、やっぱりすごい意味があるのかなと僕なんか思っちゃうんだけど、実際効果があったぞみたいなことはありますか？何か話してもらえることはあるかな？質問は難しい？

○長井さん いや、大丈夫です。今回この新聞にいろんな人から聞いた教訓というのをまとめさせていただいたんですけど、国とか県が作っている教訓集という物もあって、僕もそれをちょっと見させていただいたんですけど、書いていることがとても難しく、太いし何冊もあってどこが大事かよくわからなかったというのが印象で、この新聞だと一人に対して500文字ぐらいで大切なこともわかりやすく読みやすくということで、これを読んで興味も持ってもらえると思うし、伝えたいことというのもそういう国とか大きいところが作っている物よりは伝わるんじゃないかなと思います。

○奥村コーディネーター 何か厚い教訓集は読むのにも相当な力が要るということやね。これぐらいやったらいいんじゃないかと、先生何か？

○安富先生 27人の方、もっとたくさん聞きたかったけれども、なかなか27人は難しかったんですね。僕も最終的に全部読んだときに十人十色というか、二十七人二十七色の教訓があるんやなということと、それと共通することと二つあるんですよ、読んでみてね。そこをさっき彼らが言ったように大人たちが作っているものは難し過ぎるんだというのがやっぱりあるんですね。うちの異君あたりがわかるような教訓をつくれれば幼稚園でもわかるかなと思うので、そういうものを作っていくなとこの間から思って、昨日の夜に来年度どないしようかと僕は気が短いので来年度のことばかり、うちのこの異君の次の世代の2年生はこんな難しいことできるかなと思いつつも、と思ったときにすぐ決めて



いる、次は歌やなと。

○ト部コーディネーター 歌ですか。

○奥村コーディネーター 歌を作るのですか？

○安富先生 いやできればね。共通のワードみたいなものを何かつづいていけて楽しく伝えればなというのが。

○ト部コーディネーター それもメディアですね。

○安富先生 それともう一つ、今回非常におもしろかった話を、さっき淡路島の出身の学生が「わせらん」という話をしてましたね。淡路島はいいですね、実は正月に帰ったときに親戚一同が集まってくれてその中で彼女がその話をしたんですって。まずそれで一発目は大爆笑が起こった。その次は頑張って発表して来いと、その新聞を読みみたいなと言ってきて、それはコミュニティの強さだなというふうがいいな思いましたね。

○ト部コーディネーター いいですね。僕は聞いてて思ったのは、言っていただいた「今までのやつはすごい分厚いし、何が大事かわからへん」という、でも物をつくられているじゃないですか。あれは絞り出して残すことが目的だったんじゃないのかなと、メディアとしてね。今君たちがやっていることというのは、「わせらん」というタイトルのキャッチーさもそうだし、絞り込むことで読んでもらえるもの、読ませるものに変えていっているんだなという気がすごくするので、歌もいいんですけど、もうちょっと新聞もやってほしいなということを正直思いますね。

○奥村コーディネーター 続報ができそうな予感ささきありましたもんね。

○安富先生 もう一つおもしろいなというのが、多分今日この中にインタビューを受けた方が10人ぐらい来てて、今読んでみて、私、こんなふうにしたかなという違和感もあるかもしれないというのがちょっとあって、学生にインタビューしてもらったんだけど、インタビューすることによって新聞記者じゃない、プロじゃないから逆におもしろいかなと思って、素直にそのものを受けとめているんですけど、今この場をかりて申しわけないですけど言った意味が違っているよなと思ったらお許しを願いたいんですけど、これは多分学生の感性で受けた言葉だというふうに僕は思いたいですよね。それこそ伝わる難しさみたいなところがあると思うんですけどね。

○奥村コーディネーター 言葉だけでその部分を切り取って、それを発した人が思っている意味とそのまま受け取った側でちょっと違っている場合がありますもんね。

○安富先生 新聞なんかの場合よくそういうのがあって

すよね。ただそれもそれぞれ金田さんがおっしゃった1時間、2時間しゃべっていただいたのをわざわざこれだけの分にするという難しさというのを多分彼らは感じたと思うんですよね。

○**奥村コーディネーター** 会場ももうちょっと聞いてみます。

○**ト部コーディネーター** そうですね。実は皆さんに聞いてみたいんですけど、県立大さんのアーカイブの話がおもしろかったなと思ってまして、今ゲームと新聞と出てきて、デジタルでインターネットでムービーでみたいな、さらには外に出て行って、人とかメディアだけじゃなくて場所が伝えるみたいなのも言っていました。なおかつ、このこの取り組みは自分たちの後輩に使えるみたいなの、そういう意味では、メディアの違いの観点みたいなのと、モデルをもう一回どういうふうに分されているのか、分析というの難しくなるかな、捉えてらっしゃるのか、ちょっと教えてほしいなと思って、県立大の方に。

○**兵庫県立大学 折橋さん** 兵庫県立大学の折橋と申します。今日発表した喜田君と一緒にデジタルアーカイブの活動をさせていただきました。今のお話でいくと、まず一番目は竹谷さんがおっしゃったみたいにあくまでツールという形で、主眼においていたのが作るプロセスのところ、場を提供するというのがまず一番だったのかなというのがあります。構成としては余り触れなかったんですけどGISという技術を使って、それが位置情報、空間、場所をひもづけるということが一番重要なところかなと、最初にお話に出てたかもしれないですけど、時間的に見られるということが一番大きい、メディアとして一番大きいところかなと思って、当時の記憶、ここにいたなという場所とそこの被害の状況というのもレイヤーという形で重ねることで、当時はわからなかったけれども、この辺で火事が起こったんだとか、この辺は崩れたところがいっぱいあったんだというのがぱっと見られるというのは構成としては一番よかった点なのかなと思います。

○**ト部コーディネーター** なるほど、なるほど。ちょっと興味あるのがエピソードというくくりをしていたじゃないですか。あれはどういう観点なのですか？エピソード。

○**兵庫県立大学 折橋さん** エピソードはあのメディアの中での意味合いでいくと、言い方があれですけども、キャッチーな出来事というのが一番大きい意味合いではあったんですけども、どちらかということ調べていく上で明らかになったその時のストーリーということ

ころが一番大きくて、彼が発表で今言った、岩が流れてきたというのは芦屋川の話だったんですけども、芦屋川からかなり離れたところの家から当時の橋の柱が見つかったというのは、それを聞くと被害がそこまでのところまであったんだなというのがわかるという意味合いでの教育的な意味ということもありました。

○**ト部コーディネーター** なるほど、なるほど。そういうキャッチーな部分も入れておかないとメモリーに残っていかないですもんね。

○**兵庫県立大学 折橋さん** そうですね。位置情報では示せない思いということも加えたいという意味合いが大きかったです。

○**ト部コーディネーター** ありがとうございます。非常におもしろいですね。あともう一つ聞きたいのが舞子高校さん、舞子高校さんの発表で非常におもしろかったのは途中チームが機能しなかった、で、一回落ちるんだけど、最後真ん中に出てきて物すごいええ話してたなというのがあるんです。基本インタビューをやっていますよね。そういう意味では前に上がっている方もインタビューから新聞を作っているんですけども、その辺でインタビューの難しさとか聞き方とか質問の仕方とか何か工夫した点とか、何か教えてもらえたりしますか？

○**兵庫県立舞子高等学校 中谷さん**  口頭でインタビューしちゃって今回もわからないと言う人もいるかもしれないので、とりあえずスケッチブックに二択で、何々質問を書いてイエスカノーカシール張りを。

○**ト部コーディネーター** 質問形式をずっと聞いていくと。

○**兵庫県立舞子高等学校 中谷さん** 聞けそうな人とかを選んで行っちゃったんで、もしかしたら結果に偏りがあったかもしれないし、逆にインタビューする日を決めていたんですけども、行けない日があったり、行けない人が出てきたりしたので、そこはやっぱり大学と高校の違いがはっきり出たのかなと思います。

○**ト部コーディネーター** いや、全然そんなことないともうよ。何か聞いてみたいことありますか？このそうそうたるメンバー、後で直接聞くこともできるんですけどね。まずは何か質問とかありますか？

○**兵庫県立舞子高等学校 中谷さん** 僕は今リーダーをやっていて、来年ももしかしたらやるかもしれないんですけども、とりあえず町なかで例えばインタビューするときに注意すべき点とか、あとはもともとデスクにいたということ。

○ト部コーディネーター インタビューのときの留意点ですって？

○安富先生 現役時代、人にインタビューするのが最も苦手な人やったんですけども、新聞記者もみんなもそうだと思うんですけども、全然知らない人にいきなり、すみません、私に聞かせてくださいって物すごい勇気があるんですね。僕らも新聞記者に最初なったときに、それができなくてこういうデスクとか支局長に、おまえ新聞記者やめてしまえとか何遍も言われた。夜に知らない警察官のところに行って、事件のこと教えてくださいと聞きに行くんですけど、教えてくれるわけないので、いつも行ったふりして行ってきましたと言ったら、ほんまかと怒られる。人に話を聞くのはすごく難しい。でもそれは一種の慣れみたいなのところがあるんだけど、お兄さんたちがやったのはアポイントをとって、こんなことでよろしくお願ひしますと言っているから結構時間をとってくれるんだけど、それもなかなか時間を合わせるは大変なことがあるので、でも人に話を聞いて僕なんかが一番あかんかったことは自分がしゃべり過ぎるんです。インタビューが一番上手な人はずっと耳を傾けて、金田さんはほっといちゃべってくれますけれども、河田先生もいっぱいしゃべっていただきますけれども、なかなかしゃべってこない方をどうするかというのは難しい。

○ト部コーディネーター なるほど、なるほど。勉強になりますね。

○奥村コーディネーター 高校生に聞いてみていいですか？そのちょっとサンプルが偏ったんじゃないかとか、いやもっとチームワークしっかりやったらもっといいものができたんじゃないかとか、結構反省を言ってくれたけれども、何でそんなに完成度高いものにしようと思うのかな。言われたとおりできたし、ええんちゃうの。インタビューもしたし、質問もやったし、発表もしたし、それでもあかんのかな？

○兵庫県立舞子高等学校 中谷さん 僕らも防災を学んで中途半端な、自分よく中途半端なやつやんと言われるんですけども。

○奥村コーディネーター 中途半端は嫌やと。

○兵庫県立舞子高等学校 中谷さん やるならちっとやらないと、それこそ人の命とかにかかわってくるから、結局平等じゃないといけないし、偏ってはいけないし、というのは頭に置いていたんです。置いていたんですけども、やっぱりいざとなると、この人は行けそうやな、行ってみようって。頭でわかっているけど行動に移せないということが。

○奥村コーディネーター すごいなんかリアルな、ほかの高校生はどう。舞子代表のメッセージじゃないよね、きつと。

○ト部コーディネーター 高校と高校で伝わったという話を聞きたいんだけど。

○奥村コーディネーター 来年もやりたいみたいなのを言っていたよね。

○兵庫県立舞子高等学校 高田さん またやりたいんですけど3年生なもので。

○奥村コーディネーター 留年したらいい。

○ト部コーディネーター それはあかんやろ。

○奥村コーディネーター アドバイザーでいけばいいね。

○ト部コーディネーター その伝わっているわというのはどの辺から自分の中感じてくるわけ。

○兵庫県立舞子高等学校 高田さん

僕は行ってクロスロードをやったんですけども、クロスロードは答えがないような問いで実際にやった問題だったら、



「あなたは避難所の食糧配給職員です。避難所には今3,000人いるという情報が入っています。でも届いた食糧のおにぎりは2,000食しかありませんでした。さて、あなたは配りますか、配りませんか。」というのを何問かやったんですけども、そういうのをやって最初は難し過ぎるかなとすごい心配していたんですけども、ちょっと周りの人と話し合ってくださいと言ったら、そういう問題のほうで食いつきがすごく、これを知っていますか、三択でこれが正解でしたというよりは、これはどうしたらいいんやろと考えてもらったらおもしろいみたいで、その出た意見をこんな感じで代表例として出ますよみたいなのを言ったりしたら、すごいそんなものあるんやみたいなの、さっきの食糧配給の話だったら、おかゆにして食べたらいいじゃないかという案があって、僕自身はすごい個人的に納得した意見だったんですけども、それを言ったら、おーみたいなのりがよかったというのがあるんですけども、やっぱりなんかそういう答えがない問いとか、考えてもらうということがすごい大事なのかなと感じました。

○ト部コーディネーター なるほど、何でもかんでも言い過ぎたらあかんということかもしれないね。

○奥村コーディネーター 避難所の問題をクロスロードで高校生同士でやって、考えるの大事やなとかもってこういうことやりたいなと思っているようなんですけども、金田さんに戻っていいですかね。子供たち学生さんたちはこんなモチベーションで今やっているみたいで

ね。金田さんが避難所、24年前の教訓が伝わっていない、何とかしないといかんというのと随分違う印象があるんじゃないかと思えますけれども、どう思われます？

○**災害支援団体「チーム神戸」代表 金田さん** 直近の避難所でかかわったのは、広島でこの7月ですね。長期間にわたってかかわった避難所は宮城県石巻市で3月17日から閉鎖する10月11日まで7カ月間かかわったのですが、いろんな人がいるわけですよ。若い人も当然いるんです。なので、若い視点で切り取ったり、掘り下げたりというのはとても重要なのです。女性もいる、子供もいる、障害者もいる、外国人もいる、いろんな人たちが多様に、まちの一部を切り取ったのが避難所というところなんです。なので、こういう観点で物を見ていくのは、私たちにとっては新たな学びと発見で刺激になっています。

○**ト部コーディネーター** なるほど、なるほど。物すごいメモをとっているけど、物すごいリアルなゲームができるんじゃないかな。

○**災害支援団体「チーム神戸」代表 金田さん** いいですね。

○**奥村コーディネーター** 今使っているクロスロードもでき上がったものを使っているけれども、何かさっき前代話が合ったように結構もう自分たちの世代でね、教訓は何なのかということを考えないと伝わらないんじゃないかというのを肌を感じている世代じゃないですか。だから金田さんが今おっしゃったように、こうやと言われているのだけじゃなくて若い目で避難所の問題はどこにあるのかな、あるいは24年前の阪神・淡路大震災で避難所の問題はどこにあったのかなと考えるのも大事じゃないという、そういうサジェスションかな、メッセージかなと僕は受けとめたんですけどね。

○**災害支援団体「チーム神戸」代表 金田さん** 避難所というのがいわゆる指定避難所以外、後に指定を受ける民間避難所も含めてですけれども、多分災害規模によっては特に大阪とか南海トラフを想定したときは、既存の建物だけではとても間に合いません。阪神・淡路大震災のときも長田消防署、長田区役所、その階段の踊り場ごとで家族ずつ避難しました。熊本なんか皆さんご覧になって騒いでいましたね。公園とかに車中泊をとって、阪神・淡路大震災のときは公園のジャングルジムにブルーシートをかけてジャングルジムにもたれてお父さんが寝ていました。小さい乗用車の中で子供と奥さんが寝ていました。お昼子供たちが外で出ているときにお父さんが車の中で寝たりとか、劣悪きわまりない状況でした。阪神間の人は車をあまり持っていませんからね。電車移動

がほとんどですから。だからそういういろんなことを想像しながら進めるというのが、きっと彼らの知的な部分を刺激してすごく重要なんじゃないかなと思います。

○**ト部コーディネーター** なるほど、ありがとうございます。もし来たら答えてやっていただければと思います。非常にいい話で時間が過ぎていってしまいたけれども、そんなにまとまりもなくそろそろ終了の時間になってきているんですけども、できれば最後に作ってみたいけどこの後ちょっとこんなこと考えてみよう、もうやめるとか、何か一言言っていただいて、次じゃあこんなことをしようかなと思っているというのを、安富先生は歌を作ると言われましたけれども、何か一言ずつ聞かせていただいて、次の活動というか継続でもいいですし、お願いできたらと思います。



○**長井さん** 今回は新聞づくりだけで終わってしまったんですけども、もう少し時間があればどこかの小学校へ行ってこの新聞を使って授業するというのを最初は考えていて、かなわなかったんですけどもそれを考えています。

○**奥村コーディネーター** できたものをもっと使っていききたい？

○**長井さん** そうです。伝えていきたいということです。

○**巽さん** 今回、こういうことを学んできたのでこれから先も震災のことについて学んでいきたいなと思います。

○**奥村コーディネーター** 真面目になったね。震災について学んでいきたい？

○**巽さん** そうです。

○**ト部コーディネーター** すばらしい。

○**竹谷さん** 私は防災を通しての地域とのかかわりというのは継続して行って、ゲームのほうは何種類かあるんですけども、そちらは改善と開発に力を入れて来年も活動していけたらなと思っています。

○**奥村コーディネーター** これからに向けての抱負、歌ですか？

○**本塚先生** 歌はないですけど、防災というのはあくまで一側面なので、防災だけでこちらから地域に出ていって何かを勉強するだけじゃなくて地域のイベントとかいろんなことに逆にかかわっていただいて、もっと本質的な問題というのを共有していくことも大事なので、そういったところにも学生に積極的に加わってほしいなと、そういう意味では地域の祭りに自分たちから積極的に参加するとか、祭りのお手伝いをするとか、単純に楽しみに行くというのも大事かなと思って、地域の関係を

作ってそれを学生に提供できればなと思います。

#### ○ト部コーディネーター

ありがとうございます。ぜひよろしく願います。

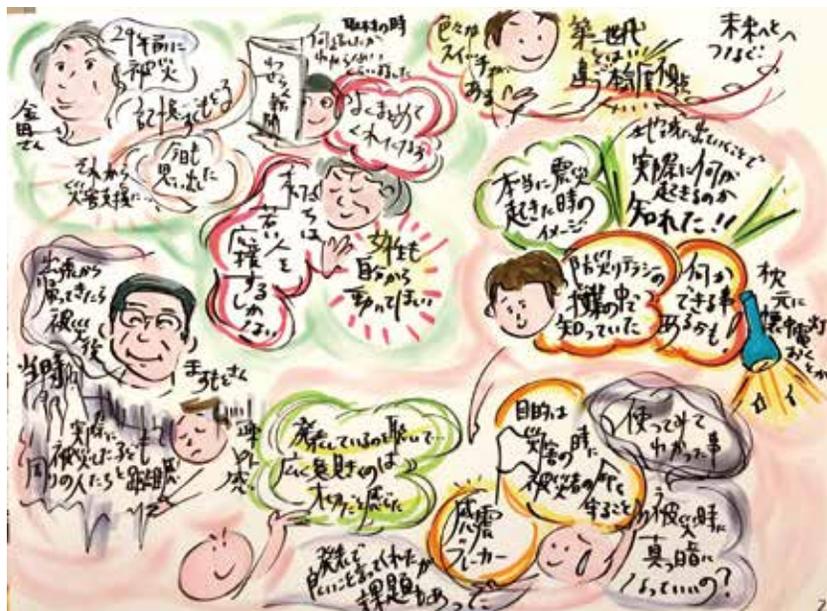
お時間になってしまいまして、最後奥村さんにバトンタッチしたいと思っていますけれども、私はちょっと聞きたいこととして今日の皆さんの話を聞かせていただいて非常にまたおもしろい発見がたくさんありました。大震災を伝えるというのは模索やと思っていて、答えはないし、どんなパターンでも伝えるという思いとか活動があればつながっていくのかなという気がすごくしました。そのときのポイントとしては、楽しめないとだめだなという感じがすごいですね。ですから、感震ブレイカーをきっかけにコミュニケーションを楽しんでいただきたいし、どの言葉にしようかな?というのも楽しんでもらいたいし、ゲームしてもいいし、それは結構ポイントの1つかなと思ったのと、あと1点、今回はたまたま二組に上がっていただいたんですが、この取組はずっと続いていきますので、次回はここのチームに壇上にも上がってもらって話をしてみようかみたいな、これを続けていきたいなと思っていますので、ぜひおもしろい活動を楽しんでやっていただいて、楽しく壇上で会話していただいて、次への模索。それをまだまだ続ける時間はあると思っていますので、継続していけたらなと思っています。私からは以上です。ありがとうございました。

○奥村コーディネーター 私のゼミ生には今日はちょっと振られなかったんですけども、多分きっかけはいろいろだと思うんですけども、阪神・淡路大震災に限らないでいろんな災害対策について考える機会を得ている人たちがここにはいて、特に若い学生さんたちはそうだと思うんですけども、ただそれを私も第二世代なので、安富先生とか河田先生とか太田先生とかそういう先生方とはちょっと違ったモチベーションで動いているとは思いますが、ただ今日の発表を聞いててもいろいろ本気になれるポイントというのがそれぞれにあって、どういうポイントがあるのかというのは今日だけでは全然把握はできないんですけども、継続していきたいと思えるような何かを押してやらないと教訓は未来に伝わっていかないような気がするんですね。一人阪神・淡路大震災の教訓を伝えていきたいですという真面目に言ってくれた学生もいて、こういう学生も中にはいるかもしれないですけども、どうすれば、阪神大水害なんて丸80年もたってどこまで伝わっているのか、私も聞いたことはあるけれども、阪神・淡路大震災と比べれば随分知識はないですよ。80年後の阪神・淡路大震災というのがどうなっているのか、ちょっと私にも想像でき

ませんけれども、94になりますからね、私。阪神・淡路大震災から80年とかしたら、生きていくかどうかかわからないぐらいの未来ですけどね、阪神・淡路大震災がどういふうに伝わっているのかわかりませんが、けど阪神大水害を経験した神戸とは違って阪神・淡路大震災を経験したここにいる世代というのは、これまでになかったモデルというか仕組みを作って80年先、90年先にもしっかり何かを伝えていこうというチャレンジをしているわけですよ。今日感じたのは非常にいろんなスイッチがあるんだなというところで、そういうのもこれからもっともっといろいろ模索していきながら、その阪神を経験して必死な思いで今何とか伝えたいと思っていられる方々に答えることを目的としなくてもいいのかもしれないけれども、私たち自身がしっかりと楽しんで毎日を生きていける、そういうものを得られるきっかけがこの防災になればいいのかなと思っていますけれども、この後、河田先生が講評してくださいますので、河田先生はこういうのを聞いてどう思われたのか、第一世代が代表してこの後我々にメッセージをいただけたらと思いますので、どうぞよろしく願います。今日はもう午後1時回っていますよね、おなかもすいてる時間だと思います。我々の司会の管理の下手でちょっと延びましたけれども、こんな感じで来年度またどうなるかわかりません。またこういうふうにご二人でやるかもしれませんけれども、ぜひ来年もここにお越しいただけたらと思います。今日はどうもありがとうございました。



# グラフィック ファシリテーション記録





# 閉会のあいさつ



河田恵昭センター長

## ○河田恵昭 人と防災未来センター長

初めまして、河田でございます。土曜日の朝10時から多くの方に、お集まりいただきありがとうございます。私は24年前に「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」を作りました。大きな災害が起こり、その教訓を将来に活かしていかなければならないという思いがあり始めました。そして10年ごとに執行部を替えて、今は「災害メモリアルアクションKOBÉ」と名称を変え、ここまで続けてきました。

なぜこれまで続けているかといいますと、私たちは災害文化を作らなければなりません。実は阪神・淡路大震災が起こるまで災害文化はありませんでした。しかし、文明はありました。阪神・淡路大震災が起こった日の夜に、大阪ガスから私に電話があり「随分大きな被害が出ているので、どこから手をつけたいのか、その情報がない。余りにも広大に被害を受けているので、どこから手をつけていいのかわからない。」と尋ねられました。修理する方も資源が限られており重要なところから修理をしなければならないので、それを私に教えて欲しいと言うのです。そこで、私は「電気のついているところからやりなさい。」と答えました。一体どこに電気がついているのかわかるのかというと、実はわかっていたのです。当時、アメリカ海軍が打ち上げている軍事衛星で夜間衛星があり、電気がついているところは明るく映りますので、そこからガスを供給する順番を優先したらどうだと私は答えたのです。実は、これで阪神・淡路大震災のガスの復旧工事をどこからやるのかということが決められました。つまり、文明が役に立ったのです。

ところが、災害文化がないので被災者の生活再建はどうするのかという知識は全くありませんでした。この災害文化を私たちが作っていかなければなりません。災害は繰り返しますので作るだけではだめです。これをどのように伝えるのかということが大事なのです。特に大きな災害ほど本当にみんなが忘れたところに突然に起こります。そこに阪神・淡路大震災の教訓を使っていたかなければなりません。

ただし、私たちの生活もどんどん変化します。例えば、去年7月の西日本豪雨で237人が亡くなりました。そのうち倉敷市真備地区では51人が亡くなり、その51人中、高齢者が46人で90%を占め、その46人中42人が避難行動要支援者でした。端的に言いますと、二階建てのお家に住んでおられて一階で亡くなられていたのです。自分の力で二階に上がれなかった人が亡くなる社会になってきたのです。

南海トラフ巨大地震が起これば、津波で22万人が亡くなるという政府の被害想定があります。高知県では今130基の津波避難タワーがありますが、例えば、南海トラフ巨大地震が起こったときに、家具の固定をしても震度6弱・6強の揺れが1分から3分続けば家の中の物は倒壊し、昨年、真備地区で起こったように玄関にたどり着けない高齢者がたくさん出てきます。ハンディキャップがなくても1分から3分揺れていたら、家具を固定しても駄目なのです。全部倒れてきます。家具の固定がなぜ良いかという揺れたときに家具が倒れないからです。少し時間が経つと倒れますが、その間に身を隠すということが大事なのです。どんなに固定しても震度6強や7では全部剥がれて落ちます。揺れた瞬間的に倒れないだけで、その時間差を稼いで机の下に潜り込むとか、掘りごたつに潜り込むことで命が助かります。22万人というのは避難が間に合わず亡くなるということですが、家の玄関にたどり着けない人がたくさん出てくれば22万人どころではないのです。南海トラフ巨大地震は震度6弱以上の揺れの想定の場合に、今4,000万人が住んでいます。4,000万人の中の高齢者で玄関にたどり着けないという人が、津波でやられると考えればとんでもないことになります。

今日は、阪神・淡路大震災の未災者が未災者にどのようにこの情報を伝える、教訓を伝えるかということを発表いただきましたが、まさにこれから起こる災害は阪神・淡路大震災でも経験しなかったような被害が出てくるということです。起こったら必ず教訓は生まれます。しかし、その教訓が、そのままでは役に立ちません。色々限界があることを知っていただき、この教訓をどんどん変えていただかなければいけません。それから我が事と考えていただける社会にさせていただかないと幾ら教訓があっても実は役に立たないのです。色んなことを経験すると経験した人は賢くなるのですが、未経験の人はそんなうとうしいことは考えたくないというベースがありますから、なかなか我が事として捉えていただけないので、そこをどう突破していくのかということが災害の教訓をどう伝えるかということと同時にとても大事だと思っています。

「災害メモリアルアクションKOBÉ」のようなことを行っているのは、実は日本だけでなく、世界的にもここだけです。つまり経験しなければ賢くならないような社会にはいけないのです。そういう意味で未災者が未災者にどう教訓を伝えるかということは本当に大事なことです。そういうことを今日わかっていただき、この運動をどのように続けていくのかというのはとても重要ですし、これは一人ひとりがサポートしていただかなければなりません。これは社会の問題ではなく、一人の人間としての生き様の中にこのことを持っていたかかないと、私たちの社会は潰れてしまうということを考えていただき、この機会に、今までの考え方をもう一度リファインするということに今日の成果を使っただけだと思えます。

少し難しいことを申し上げましたが、なぜ24年も続けているのかということに、これからの安全・安心な社会を作るには、未災者が未災者にどのように過去に起こった災害の教訓を、しかも、それがそのままではなく新しく価値観を変えて伝えていく必要があることをご理解いただき、これからも活動をしていただきたいと、私自身がそのように考えています。

実は私、今年から赤系統のネクタイをすることにしています。政府を動かすために攻撃的に行くためです。まずはアクティブな服装ということで赤系統のネクタイをすることにしています。私もそういう単純なことですけど努力をしますので、皆さんも単純なことでもいいですから努力を継続していただきたいと思います。今日はありがとうございました。

# 災害メモリアルアクションKOBÉ2019のことば



災害メモリアルアクションKOBÉ

## ACTION 2019のことば

授業で知っていたことも地域に出ていくことで、  
実際に何が起きるのか知れた。  
本当に震災が起きた時のイメージができた。

つながりができていくこと、  
コミュニケーションを  
とることに喜びを感じる。  
それがモチベーション。

高校生から高校生へ伝えてみた。  
伝わったと思った瞬間があった！  
正解がない問題を考えてもらおうと  
食いつきが違った！

活動するまでは考えもしなかったこと、  
伝えないといけない事が  
たくさんあるんだなと気づいた。

先輩たちは、どうして、一生懸命に  
ぼくたちに伝えようとするのですか？

自分たちがやって  
楽しいことが  
防災につながっている。

(先に)死ぬからです。

教訓がすべてではなく、  
正解がない中で、たくさんの情報をも  
っておく必要がある。

アーカイブを作るプロセス  
=コミュニケーションの場をつくることを重要視した。  
これはこれから使えるモデルだと思う。

教訓には限界がある。  
その時代の価値観に更新して  
継続しないとけない。

未来へとつなぐ活動をはじめたり、続けたりするには  
色々なスイッチがある。  
第一世代とはまた違った、  
それぞれに本気になれるポイントがある。

避難所は社会の縮図、いろんな人がいる。  
だからいろんな視点で考えないとけない。  
若い人の考えも必要だし、  
若い人のモチベーションで  
活動すればいい。  
それは、他の人への刺激にもなる。

伝える大震災、つながる防災

災害メモリアルアクションKOBÉ

# ACTION 2019

## KOBÉのことば

参加無料

### 活動報告会

日時

2019.1.12[SAT]  
10:00 → 13:00

会場

阪神・淡路大震災記念

## 人と防災未来センター

これまで「阪神・淡路大震災」を経験した世代が教訓と提言をまとめた「メモリアルコンファレンス・イン神戸（1996～2005）」、そして、その教訓を次世代に伝えるために「災害メモリアルKOBÉ（2006～2015）」を実践してきました。

2016年からこの先の10年を見据え「KOBÉのことば」をキーワードに「災害メモリアルアクション KOBÉ」という取組みを開始しました。阪神・淡路大震災のつらい経験を二度と繰り返したくないという強い思いから、学んだことを次に活かすことができる形をつないでいこうという取り組みです。大震災から20年以上経った今だからこそ聞けることば。今しか聞けないことば。その個々の経験を未来へどう活かせるか。世代を超えて、共有し、話し合い、未来をつないでいく。今のKOBÉだからこそできるアクションです。

近い将来起こりうる南海トラフ巨大地震を見据えて、これから大震災を経験するかもしれないすべての人びとへ、防災の意識を継続させ、少しでも被害を小さくするために、「未災者」が大震災を知り、さらに「未災者」に伝え、つないでいく、新しいチャレンジです。

私たちはこれまでにないアクションにより、継続的な取り組みの検証と検討の場を通して、将来の被災者を減らします。

### プログラム

※敬称略

#### 10:00 開会挨拶

災害メモリアルアクションKOBÉ 企画委員会委員長  
人と防災未来センター 震災資料研究主幹  
京都大学防災研究所 教授 牧 紀男

#### 10:05 活動発表

発表：①兵庫県立舞子高等学校  
②関西大学 社会安全学部 奥村研究室  
③兵庫県立大学 + 神戸市立渚中学校  
④国立明石工業高等専門学校 D-PRO135<sup>®</sup>  
(明石高専防災団) 開発チーム  
⑤国立明石工業高等専門学校 D-PRO135<sup>®</sup>  
(明石高専防災団) 地域連携チーム  
⑥神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ

#### 11:50 パネルディスカッション

##### 「今、私が伝えたい??こと」

コーディネーター：関西大学 社会安全学部 准教授 奥村 与志弘  
防災デザイン研究会 GK京都 デザイナー ト部 兼慎  
グラフィックアシリエーション：TAGAYASU 鈴木 さよ  
国立明石工業高等専門学校 5年生 多田 裕亮  
パネリスト：国立明石工業高等専門学校 D-PRO135<sup>®</sup>  
(明石高専防災団) 地域連携チーム  
神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ

#### 12:55 講評・閉会挨拶

災害メモリアルアクションKOBÉ 企画委員会顧問  
人と防災未来センター長 河田 恵昭

主催：人と防災未来センター、京都大学防災研究所

共催：京都大学防災研究所 自然災害研究協議会

企画：災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会

後援：兵庫県教育委員会/神戸市/神戸市教育委員会/朝日新聞神戸総局/読売新聞神戸総局/毎日新聞神戸支局/産経新聞社/神戸新聞社/NHK神戸放送局/ラジオ関西/神戸学院大学/明石工業高等専門学校/関西大学社会安全学部



災害メモリアルアクションKOBÉ

# ACTION 2019

全体テーマ:

## KOBÉのこぼ

「KOBÉ」とは、阪神・淡路大震災の被災地域全体と、災害の影響を受けたひと、そして災害後まちのために活動したひと、すべてを表現しています。

阪神・淡路大震災から24年、大震災を直接経験していない若い世代の人たちが、災害を経験した人々へのインタビュー、アンケート、交流事業などの活動を通じて、次世代に伝えるべき「KOBÉのこぼ」を紡ぎ、活かし、拡げます。「過去・いま・未来」を見据え、世代を超えて活動する、最先端のアクションです。

### 兵庫県立舞子高等学校



私たちは災害時その人にとってベストな選択をし、後悔しないでほしいという目標を胸に活動しています。近年災害が多発し、災害に関心がない人々も災害を無視できない状況にあります。高校生のうちから防災に深く関わっている

私たちは、災害時どのような行動をとるべきか判断できます。そして、その学びを周囲の方々に役立ててもらおうと、今後も活動に取り組んでいきたいと思ひます。

### 神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ



安富ゼミとしてこのプロジェクトに参加して3年目。先輩方が取り組んできたテーマ「阪神・淡路大震災の教訓は本当に伝わっているのか」を受け継ぎ、新たに新聞づくりに挑戦しました。防災の第一線で活躍する様々な分野や、

市井で頑張った方々に、阪神・淡路大震災の教訓についてインタビューし、それを分かりやすく後世に伝えられるように仕上げました。震災の記憶が残るような形にできたのではないかと自負しています。

### 関西大学 社会安全学部 奥村研究室



阪神・淡路大震災では、直接、地震で命を落とさなくても、大きな精神的ストレスと劣悪な生活環境によって失われる命があるという事実が初めて広く社会に認知されるようになりました。「災害関連死」です。あれからまもなく24

年、私たちの研究室では、その後の災害でも繰り返される関連死の発生状況を分析するとともに、当時の教訓は生かされているのかを検証しています。

### 国立明石工業高等専門学校 D-PRO135° (明石高専防災団)



#### 地域連携チーム

私たちD-PRO135°は、地域と連携した活動をしています。明石市東二見地域の減災まちづくりに協力し、感震ブレイカーの設置・点検や、子供世代を対象にしたイベント「防災寺子屋」の企画・運営

を行いました。また、魚住まちづくり協議会の活動支援として、D-PRO135°が開発した防災ゲーム「RESQ」体験会を行うなど、防災活動のネットワークを広げています。



#### 開発チーム

私たちD-PRO135°は、防災ゲームの開発・改良を行っています。製作した防災ボードゲーム「RESQ」の体験会での意見を基に、文言の修正や、地域に合わせたボードが作れるツール作りを進

めています。さらに、神戸高専の教員と開発した避難所運営ゲーム「チャレンジ」のルール改善の協力もしました。高専生ならではの視点を活かして遊んで学べる防災ゲーム作りを進めています。

### 兵庫県立大学 + 神戸市立渚中学校



阪神・淡路大震災と阪神大水を体験した方々の体験談や寄せられた写真などを誰でも閲覧することが出来るデジタルアーカイブ化することで、大災害の記憶や記録を次の世代に継承していくための活動を行っています。これら

の活動には兵庫県立大学の大学生・院生と渚中学校の生徒が参加し、体験談を聞き取ったりデジタルアーカイブを作成したりしています。

パネルディスカッションテーマ:

## 今、私が伝えたい??こと

防災は総合的で広い視野が求められる社会テーマです。

そんな広く、大きなテーマに魅力を感じてアクションしている学生たちの、防災を「伝えたい」、「活かしたい」の原動力や取り組みについて考えます。

新聞で伝える活動をするチームと感震ブレイカー設置の活動をするチームに登場していただき、「コミュニケーション」に焦点をあて、次の時代に「KOBÉのこぼ」が伝わる形を探ります。

この時間は、できるだけ会場のみんなでディスカッションできる活発な意見交換の場づくりを目標にしたいと思ひます。

お問い合わせ:

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター事業部普及課  
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-2 西館6階  
Tel : 078-262-5060 Fax : 078-262-5082  
Email : hitobou-fukyuuuka@dri.ne.jp  
HP : [http://www.dri.ne.jp/memorial\\_action\\_kobe](http://www.dri.ne.jp/memorial_action_kobe)

本研究は京都大学防災研究所共同研究(平成30年度一般研究会30K-01)の成果によるものです。

# 災害メモリアルアクションK0BE企画委員会名簿

## 【企画委員】

※委員は氏名五十音順

役 職	氏 名	所 属
企画委員長	牧 紀男	京都大学防災研究所
委 員	伊藤亜都子	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	卜部 兼慎	NPO法人防災デザイン研究会
	太田 敏一	防災科学技術研究所客員研究員
	大塚 毅彦	国立明石工業高等専門学校
	奥村与志弘	関西大学社会安全学部
	河田のどか	(特非)さくらネット
	近藤 誠司	関西大学社会安全学部
	高森 順子	大阪大学大学院、阪神大震災を記録し続ける会
	中野 元太	京都大学情報学研究科博士後期課程
	西口 正史	ラジオ関西報道制作部 記者
	馬場美智子	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	福岡 龍史	エフエム・プランニング
	本塚 智貴	国立明石工業高等専門学校
	安富 信	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	横山 愛子	株式会社GK京都
和田 茂	兵庫県立舞子高等学校	

## 【サポーター】

	甲斐聡一郎	兵庫県災害医療センター
	越山 健治	関西大学 社会安全学部
	諏訪 清二	防災学習アドバイザー・コラボレーター
	細川 顕司	公益財団法人市民防災研究所
	松元 正博	NPO法人 人・家・街・安全支援機構
	宮本 匠	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	矢守 克也	京都大学 防災研究所

## 【顧問】

	河田 恵昭	人と防災未来センター、関西大学
	土岐 憲三	立命館大学衣笠総合研究機構 歴史都市防災研究所(特別研究フェロー)
	新野幸次郎	神戸大学(名誉教授)
	林 春男	防災科学技術研究所

# 災害メモリアルアクションK0BE2019参加学生名簿

※順不同

グループ名	氏 名	所 属	
兵庫県立舞子高等学校	加藤 昌也	兵庫県立舞子高等学校	3
	住吉 悠	兵庫県立舞子高等学校	3
	信川 亮太	兵庫県立舞子高等学校	3
	高田凜太郎	兵庫県立舞子高等学校	3
	大塚 美紗	兵庫県立舞子高等学校	2
	中谷 海	兵庫県立舞子高等学校	2
	戸澤 幸咲	兵庫県立舞子高等学校	1
	前林 亮香	兵庫県立舞子高等学校	1
	松岡 紗輝	兵庫県立舞子高等学校	1

グループ名	氏名	所属	
関西大学 社会安全学部 奥村研究室	川崎 雄太	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	3
	藤岡 拓実	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	3
	豊澤 弘八	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	3
	西川 智裕	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	3
	稲葉 真緒	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	3
	久保 真羽	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	3
兵庫県立大学 + 神戸市立渚中学校	折橋 祐希	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科 修士課程	M1
	喜田悠太郎	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科 修士課程	M1
	村尾 佳苗	兵庫県立大学環境人間学部	B3
	西田 凜	神戸市立渚中学校	
	伊藤 実八	神戸市立渚中学校	
	太田 咲花	神戸市立渚中学校	
	猪谷 朝香	神戸市立渚中学校	
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°(明石高専防災団) 開発チーム	石原 由貴	国立明石工業高等専門学校	2
	塩坂 優太	国立明石工業高等専門学校	2
	金子 雄哉	国立明石工業高等専門学校	2
	竹谷 夏葵	国立明石工業高等専門学校	4
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°(明石高専防災団) 地域連携チーム	谷郷 風人	国立明石工業高等専門学校	4
	多胡 旭	国立明石工業高等専門学校	4
	榎本 卓真	国立明石工業高等専門学校	4
	茶島菜々子	国立明石工業高等専門学校	4
	上野 美里	国立明石工業高等専門学校	4
	樹下 晴香	国立明石工業高等専門学校	4
	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	池内麻菜美	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
池上ひなの		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
岡崎琳太郎		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
川口 祐生		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
巽 翔		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
寺井 美紀		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
寺尾 莉子		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
土居 大輝		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
長井 裕貴		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
林 修功		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
東 萌菜美		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
森 達也		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
森脇 稔喜		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
安藤 彪華		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2
楠橋 力		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2
佐々木文都		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2
佐藤 菜都		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2
鈴木 大貴		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2
武岡 洸樹		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2
田邊 銀平		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2
灘井 彩乃		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2
林 優真		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2
山 楓生		神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2
大矢 哲也	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2	
榎本 倅生	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	2	

# 発表風景・交流会等





## キックオフ会 (ワークショップ) 2018年8月17日



## 中間発表会 (ワークショップ) 2018年11月23日







## 平成30年度 災害メモリアルアクションKOBÉ 報告書

主 催：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター  
京都大学防災研究所  
共 催：京都大学防災研究所自然災害研究協議会  
企 画：災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会

人と防災未来センター 事業部普及課内  
災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会  
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-2 西館6階  
Tel：078-262-5060 Fax：078-262-5082  
[http://www.dri.ne.jp/memorial\\_action\\_kobe](http://www.dri.ne.jp/memorial_action_kobe)

本研究は京都大学防災研究所共同研究（平成30年度一般研究集会30K-01）の成果によるものです。